

## ブータン・ヒマラヤにおける生業様式の垂直構造

月原 敏博

京都大学大学院文学研究科

ヒマラヤ南面の諸地域を、垂直かつ南北に切って相互に比較することは、文化地理学的ヒマラヤ研究における基本作業であるが、事例の集積や初歩的な比較整理自体が、決して十分でない。本稿は、ブータン西半部における生業様式の垂直的概観を試み、高度差の大きい季節移住様式の重要性を指摘するが、情報は断片的であり、初歩的なまとめの段階を越えない。ブータン再訪を期したいが、未発表の旧稿に加筆した程度でこれを発表することにしたのは、まだ類似の報告例がなく、また本誌1、2号に述べてきた論旨との関連が深いためである。本稿を、ブータンの特徴を把握し、かつヒマラヤ南面地域の、経済・社会の垂直構造を比較整理するための、小さな一歩としておきたい。

### 1 ヒマラヤの垂直構造比較

ブータン・ヒマラヤをはじめて訪れたとき、最も印象的であったことの一つは、ヴァーティカルな変化の豪快さであった<sup>1)</sup>。

ブータンでは自然林がよく残っており、高度を上げるにつれ、それがみごとに変貌した。熱帯林から、照葉樹林、針葉樹林、高山草原を経て、最後には万年雪の氷河へと至ったのである。温量条件は、乾湿条件と並んで、植物相のタイプの決定に果たす役割が非常に大きいため、標高に従って、自然景観がかなり垂直的に変化し、重層的な生態区（高度帯）が存在するのは当然であった。ヒマラヤ山脈のもつ落差は巨大であり、熱帯から極へという水平距離（緯度）に相当するほどの多様性が、その巨大な高度差の中に、タテに圧縮されているともいえよう。

しかし、高度によって変化するのは、自然景観だけではなかった。人間が手を加えることで生まれた生活の景観、すなわち集落景観なども、おおよそ高度に従って変化したのである。これの形成は、第一には自然と生活の間の技術適応のメカニズムによっていると思われた。すなわち個々の地域社会は、作物栽培や家畜飼養、森林産物採集などを通して、衣食住の素材を獲得・加工・利用す

る一連の技術をもっているが、標高に従って自然条件が変化すれば、そこには、よりその場に適した技術的適応が求められて不都合でない。土地利用技術の伝播等によって、技術レベルにおけるさほどの地方的遍在がなければ、この種の適応が各地で進み、結果として生活景観にも高度帯の様相が成立して、垂直変化がみられることになっても不思議ではない。

こうした景観の変化に加え、さらに興味深いことには、地域住民のもつ、言語や衣装、雰囲気といったものまでもが、変化するさまさえ観察できた。景観という、客体的で、空間的（物質的、地理的）なものにとどまらず、より主体的で、非空間的（精神的、社会的）な文化の諸相までもが、ある程度は垂直的にもいいうる具合に、変化したのである。しかし、こうした面を共有する社会集団の、地域単位や分布の問題を正確に把握できた訳ではないとはいえ、実見したり聞き取りで知りえた例だけでも、同程度の居住高度においても、場所による違いは少なくなかった。そのため、この点に関しては、「高度によって違う」と自然景観のごとく結論してしまうことには疑問も残った。

ヒマラヤの、自然と文化の垂直分布、垂直構造

といえば、ブータンと同じくヒマラヤ南面に位置し、類似の自然条件を持つ中部ネパールを対象とした、川喜田二郎、高山龍三、飯島茂ら先学諸氏による研究<sup>2)</sup>がまず想起されるであろう。そこには、植生などの自然や、生業の垂直分布が、実証的によく示されている。とくに、民族や文化が、標高によってかなりみごとに棲みわけ(あるいは分化する)様も示され、文化の垂直分布の様相は、低所(標高約1200m以下)を占める「ヒンドゥー文明」と高所(標高約3000m以上)を占める「チベット文明」、そしてその中間の高度に位置し、歴史的に前2者の影響を受けるなどして一部は「半文明化」するに至った「トライバル文化」の3者に総括されている(図1)。

なかでも川喜田氏は、民族や文化の生態学的な棲みわけ状況を形成した要因を、文化に対する自然環境の影響にもとめ、環境利用から出発して、断片的な状況証拠を示しつつ、中間項を積み上げることが可能であることを示し、環境-作物帯-土地利用-労働-労働組織-社会組織-社会文化複合という具合に、生態学的な連関の仕組みが存在することを示唆している。そしてさらに、垂直的にみた中部ネパールの文化史を推定しているほか、文化の発展段階のうえで「同位文明」である「チベット文明」や「ヒンドゥー文明」が、なぜ垂直分布の上で制約を受けるのかを内在する性格にもとめ、その性格形成の生態学的構造モデルを提示することまで行っている。

最初の印象や先行研究が鮮明であったために、続くブータン行では、垂直という軸をより強く意識しながら現地を見ることになったが、中部ネパールと比較しようようなかたちで、ブータンの垂直構造をまとめる必要を強く感じた。その理由は、ヴァーティカルにヒマラヤを見た川喜田氏らの研究方法に、多くの刺激を受けたことだけによるのではない。ブータンの垂直構造は、いろいろな点で中部ネパールと違い、その違いが提起する問題は、川喜田氏らの解釈によって切り開かれたヒマラヤ・チベットの理解を、より妥当なものにするためにも重要と思われたのである。

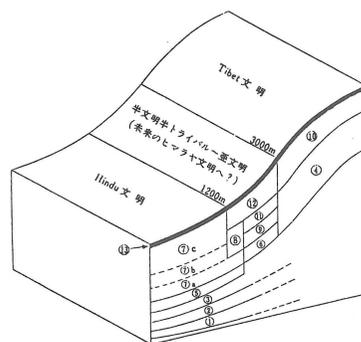
ではどこが違うのだと問われると、本論に後述するブータンの特徴の一端にふれざるをえないが、川喜田氏の用語法に従っていえば、違いの核

心は、1:ブータンは、中部ネパールにおける「トライバル」および「ヒンドゥー文明」の高度を含め、ほぼ全体を「チベット文明」の地と結論せざるを得ず、2:民族に関しても、中部ネパールにおいてかなり鮮明であるという垂直的な棲みわけ(ないし分化)は、ほぼ全体が、いわゆるブータン人で占められているためにとくに明瞭ではなく、むしろブータン全体でみれば、東西方向での違いの方が、重要とさえいいうる点にある(とくに、南部への「ネパール人」入植以前において)。

中部ネパールとブータンの例は、自然景観や生活景観の垂直変化、垂直分布の様相ではかなりの程度類似しているのだが、「文明」や民族に垂直的分布限界があって棲みわけるか否か、こうした文化の差異を垂直軸の輪切りの思考で整理しきれるか否か、という点では、むしろ対立するという解釈も、可能なのである。しかし、これについての議論は最後におくことにして、垂直(南北)断面比較という本稿の視点について、ヒマラヤを概観しながら確認しておきたい。

地域として言及されるとき(のヒマラヤ<sup>3)</sup>)は、巨視的にみれば、ヒンドゥースタン平原とチベット高原それぞれとの地形上の境界をなすタライとヒマラヤ主脈によって南北を囲まれるヒマラヤ南面の斜面帯であり、水平においた長辺を軸に傾けた、長方形にもたとえうる。この内部、つまりグレート・ヒマラヤの前面をなす帯状の範囲の地形は、複雑ではあるが、ヒマラヤ主脈に並走するいくつ

図1 川喜田による中部ネパールの文化の垂直分布と文化層(推定)整理の図式



川喜田 (1977:41) による

かの山地列からなっている。この設定によって、ヒマラヤの各地方は、東西方向に地形上の一定の同質性をもっているが、その地形の影響によって、気候や植生分布の上でもまた、東西方向の同質性を持っていることを指摘できる（緩やかな東西変化の傾向はもちろんだる）。

しかも、それぞれの地方において、タライとヒマラヤ主脈というふたつの地形的境界は、気候や植生に限らず、歴史・文化の意味でも、ある程度は境界性をもってきたといつてよいだろう。しかしその境界性が、タライ以南のインド世界や、ヒマラヤ主脈以北のチベット世界と対置されるべき独自の文化領域として、ヒマラヤ地域を区切り得る性格のものか否かは疑問である。つまり、ヒマラヤを、独自の文化的まとまりをもった領域と呼べるかである。

この問題は、ヒマラヤ諸地方における文化の検討を必要とし、しかもそのとき、複雑な諸相を持つ個々の文化の、全体性をいかに規定しうるのかという、文化把握における本質的課題にも迫られることになる。本稿は、ヒマラヤの文化領域区分を主題とするのではないが、冒頭に述べた変化の第3の点である、主体的、非空間的（精神的、社会的）な諸側面が、文化全体の中核的部分を構成していることは疑いえないであろう。

そこで、これを確認した上でいえば、ヒマラヤは、諸文化の接触地帯であって、文化領域<sup>4)</sup>の大区画の上では、インド文化、チベット文化、イスラム文化など、隣接する諸領域に含むべき諸地域に分割されてしまうと考えられ、ヒマラヤを一つのまとまった文化領域とは、捉えがたい（図2）。

すると逆に、文化を越えた通ヒマラヤ性は、はたして存在しないのかという疑問が生じる。たとえば、ヒマラヤにすむいくつかの民族が、「ヒマラヤン」という、あたかも実在する一民族のごとき名称と呼ばれ、自然利用や生業様式以外でも、宗教などの、精神的な面の類似性が指摘されることも、従来たしかにあったのである。

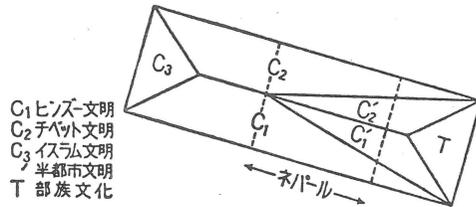
これを考えると、ネパールやブータンという、ヒマラヤの全長にははるかに及ばないながらも、ほぼ先に述べた二つの境界によって南北を区切られた長方形の範囲を領域とする国家が現に存在

していることは、まず見逃せない<sup>5)</sup>。またそうした、ヒマラヤ南斜面を領域とするような、政治、経済、社会の統合が生じるときには、その中心は、いわゆる「ミッドランド（中間山地、中部山地）」と呼ばれる温帯ゾーンの、しかも谷あい位置するのが一般的であったのではないか。その背景にもなるが、ミッドランドは、タライ近くの低地やヒマラヤ主脈近くの高地よりもはるかに高い人口密度を、比較的古くから持っていた可能性が大である。

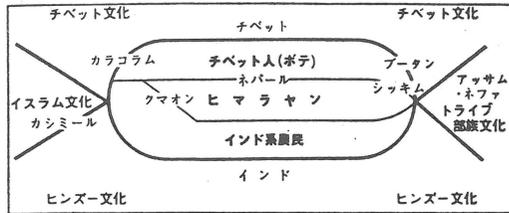
要するに、ヒマラヤ地域は文化領域というよりもまずは自然的区域であり、それも厳密には、ある地形的境界という意味以上のものではない。文化的には多様であり、とくに「高文化」という観点からした文化領域という意味では、分割されてしまう。しかし、東西に並ぶヒマラヤ各地方が、地形や植生といった自然条件のほかにも、人文的要素におけるある程度同質性をもちうるからこそ、自然に人間が適応する際の、文化を越えるヒマラヤ的普遍性を、抽出できる可能性もないわけではない。

こうした事情が、とりあえずミッドランドを中

図2 ヒマラヤの文化領域の表現例



1. 高山 (1970:110) による



2. 佐々木 (1972:88) による

心において、タライからヒマラヤ主脈へという範囲でエコロジカル・セッティングを一応揃えたうえで、自然条件の上での特徴をおさえつつ、その上に展開している経済・社会の空間的広がりや、民族・文化の領域を検討することに、試行的意義を与えるのである。しかしこのセッティングにおける南北の区切りは、あくまでとりあえずのものであり、民族・文化分布の形成過程を考えるとときには、むしろ前提となつてはならず、外部との関係が常に注意される必要がある。

このことを別の言葉で表現すれば、民族、文化、経済、社会など、人文的要素における何らかの同質性が東西方向（同程度の標高）で発見されたからといって、それが、ヒマラヤの高度帯沿いに起こった文化や民族の伝播の結果と予見される必要はなく、むしろ、インドやチベットからの伝播があった、あるいは、それらから影響を受けたことで、ヒマラヤの各地方という個別の周辺部が、方言圏のごとき経緯によって同質化を促された、などの可能性が意識されるべきである。外部とはさほど関わりなく、ヒマラヤの長方形内の東西方向で、民族の移住・拡大と文化伝播が非常に顕著なたちで生じた例としては、西から東へといまでも進んでいる、パハーリー語話者の移住やいわゆる「ネパール化」しか、筆者自身はいまのところ知らない。

ところで、もう一つ注意しておくべきことがある。冒頭から、垂直軸を意識してヒマラヤを捉える視点を強調してきたが、この視点は、ヒマラヤを、傾いた長方形斜面と想定し、その長方形斜面を立面投影させると、高度帯が明確な横縞模様に見えるはずだ、という、地形を極度に単純化した発想にほかならない。たしかに高度は、植生を決めるのに重要である。しかしこれは、実際のところ、植生決定に重要な温量と乾燥度のうち、温量を高度に読みかえることでしかない。だから乾燥度は捨象されており、温量といっても、斜面方向などの日射条件さえ省かれることになる。

こうしたことは、個別地域事例に即して、そこでの自然条件をより細かなスケールで把握しようとすればするほど、重大な誤差を生む。つまり、ヒマラヤの気候・植生条件の空間的配置を整理するには、高度（垂直軸）に従った整理の枠組みに、

南北や東西という座標軸をも、乾燥度とも複合しうる形で持ちこむ必要がある（Troll 1972）、厳密には、ヒマラヤでも生態区界と等高線は一致するわけではない。

高度で生態を語るにも精度上の限界があることになるが、この誤差が巨視的にもっともひびいてくるのは、ヒマラヤ主脈に並行する前山の、南北の斜面の気候・植生の違い（高度の変異を含む）、そして谷あいの、比較的乾燥した気候・植生である。

今後の研究の進展のためには、こうした、中程度のスケールにおける、地形の影響への注目は重要に思われ、本稿でもこれへの配慮を意識している。だから、ここでいうヒマラヤの垂直構造とは、垂直断面（南北断面）のうえに展開している経済・社会の構造のことであり、また、垂直構造比較とは、その東西方向での比較（断面比較）を想定している。

本稿は、とくにブータン西半部の中央の谷々から北部高地に中心をおきながら、ブータン全体の生業様式が、いかに垂直（かつ南北）に展開しているかの初歩的な展望を試みるものであるが、ブータンの社会や文化の歴史的背景にも注意して、南北方向の文化的影響の検討や、ヒマラヤ東西方向での比較を通して特徴の抽出を試みるのは、以上述べてきた考察によっている。

## 2 ブータンの自然景観

以下本稿では、ブータンのミッドランドの谷あいに視点を置く観点から、おおよそ標高に従って展開する南から北への地形を、1：ドゥアール、2：南部山地、3：中央の谷々、4：北部山地、そして5：ヒマラヤ主脈までの北部高地、という具合に、帯状に識別して説明したい。

そして東西については、おおよそペレ・ラ（Pele La）をもって、ブータンを西半部と東半部に分け、東部、中部、西部と分けて考えるときには、東部はタシガン（Tashigang）、モンガル（Mongar）、中部はブムタン（Bumthang）とトンサ（Tongsa）、西部はハ（Ha）、パロ（Paro）、ティンプー（Thimphu）、プナカ（Punakha）をそれぞれ中心とするタテの地域（水系）を想定することにする。

1) 地形と河川

ブータン(図3)は、7000m級の高山を抱くヒマラヤ主脈(Great Himalaya)を北境とし、ベンガル-アッサム平原に連なるドゥアールと接する標高300mに満たない場所を南境とする。この地形的枠組みが国家領域となっている点では、ネパールとならんで、ブータンは典型的なヒマラヤ国家の例といえる。

ハーゲン(Hagen 1971:49-55)などによる整理に代表されるヒマラヤ一般の地形構造(図4)

は、ブータン(図5)にも適合していると考えられる。ネパールのタライ(Terai)はドゥアール(Duars)に、マハーバラト山脈(Mahabharat Lekh、あるいは、Lesser Himalayaと呼ばれることもある)は南部山地に、ミッドランド(Midlands)は中央の谷々のあるゾーンに、それぞれ対応している。

主要河川は、ヒマラヤ主脈の氷河舌端(標高4600~5200m)に源を発し、氷河地形(標高約3800m以上)が開けた北部高地を経たのち、北部山地の合間でV字谷を刻むが、それを抜けた中流

図3 ブータンの地勢

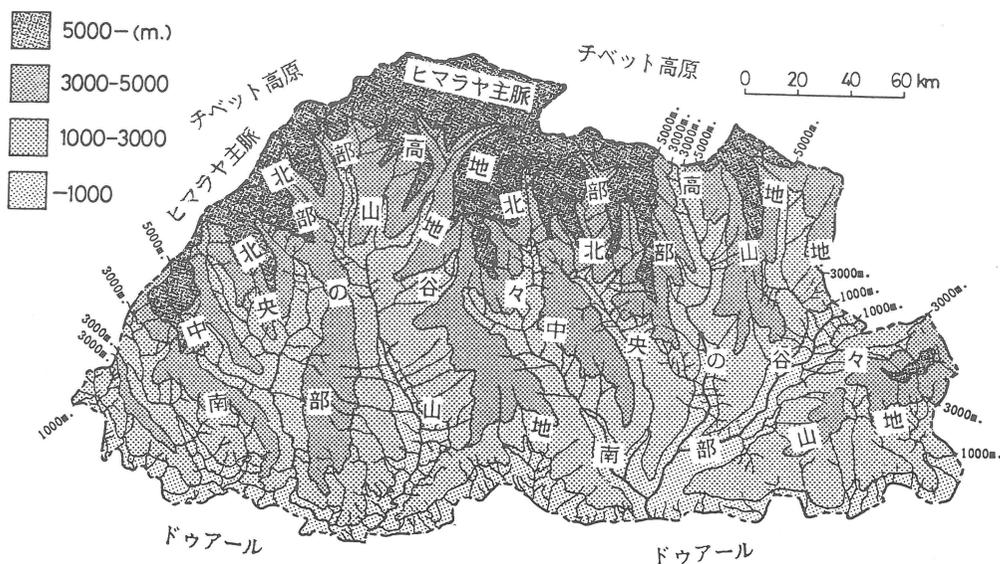
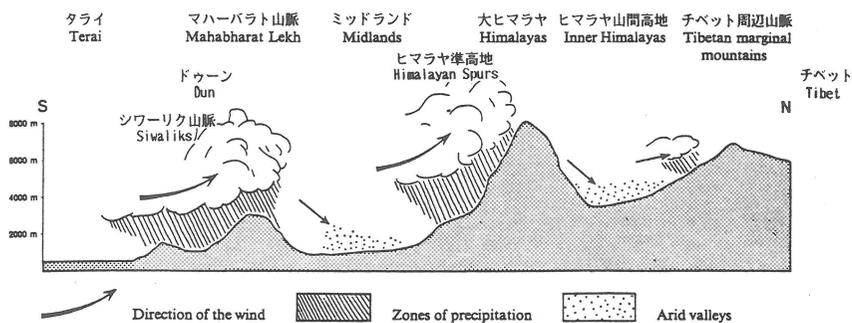


図4 ヒマラヤの地形断面と降雨パターン



ハーゲン (Hagen 1971:57) による

部において、比較的平坦で開けた河谷をつくる。そして、南部山地に入って再び深い峡谷をなしたあと、ほぼ平坦な、ベンガル-アッサム平原のドゥアール (Duars) に達している。

ブータン、特にその西半部の地形の特徴は、シワリック山脈 (Siwaliks, Sub-Himalaya と呼ばれることもある) が消滅していること (Godwin-Austen 1894:636 ; メイスン 1975:19-20)、そしてマハーバラト山脈にあたると考えられる南部山地も、走行の東西性が不明瞭で、しかもこれが大

変高く、標高3400から4500mのピークが林立していることである。

最後の点は、他のヒマラヤにおいてミッドランドの南に位置する山々が低く、たとえばネパールにおいて、シワリック山脈が平均標高1500m程度 (若干のピークでも2000m前後まで)、マハーバラト山脈が標高1800から2700m程度 (若干のピークでも3000m前後ほど) の高さまでしかないのとは対照的である。

結果として、ブータン (とくに西半部) の南部

図5 ブータン・ヒマラヤの地形断面

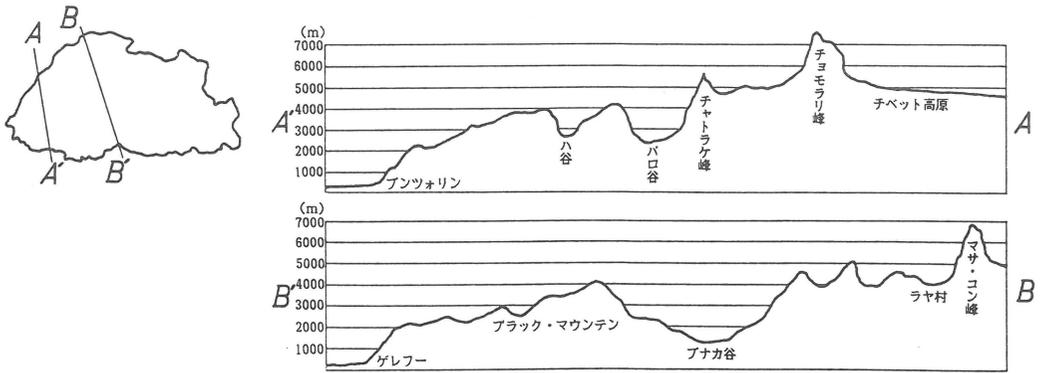
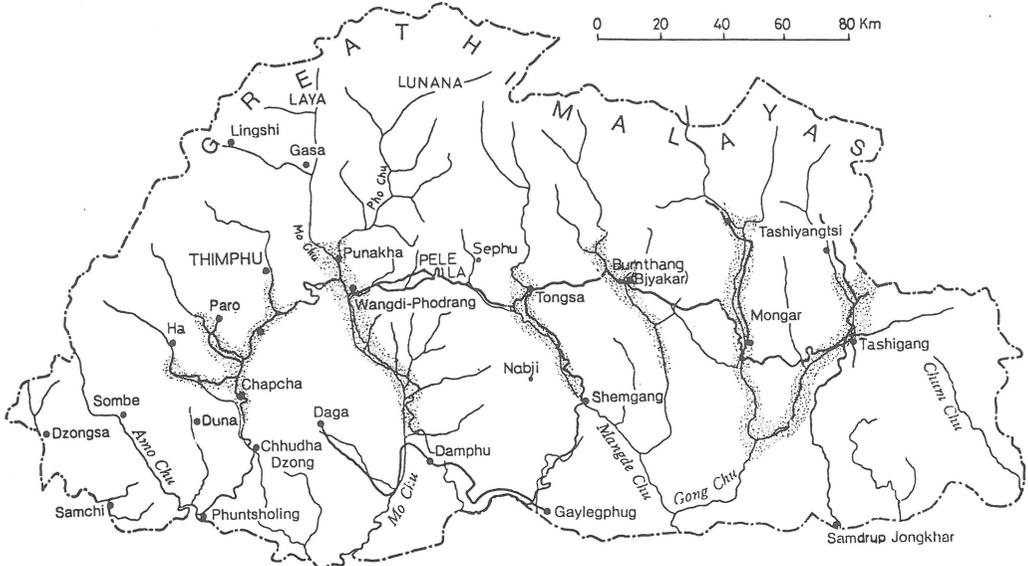


図6 ブータン・ヒマラヤの主な地名と乾燥谷の位置



山地はたいへん高く険しいものとなっている。参考までに、この点について記したモーリスとゴドウィン・オースティンの言をひいておこう。

「ブータンの南の国境全体にわたって、ヒマラヤ前山は、平原からとても険しく急激にせり上がっており、他のヒマラヤのように緩やかな登りはない。」  
(Morris 1935:209)

「山裾の平原から20マイル以内のところに、14500フィートもの高さのある山塊が存在すること、そしてシワーリクが消滅していることは、東部アッサムからパンジャブ地方に至るまでの、他のヒマラヤ南縁では見られないことである。」(Godwin-Austen 1894:636)。

河川についてみれば、ネパールなどでは、ヒマラヤの前山であるマハーバラト、シワーリク、ヒマラヤ主脈の各山脈がある程度距離をおいており、ミッドランド、あるいはドゥーン(ダン)のゾーンにおいて、かなり広潤な盆地も形成されている。そして山脈の顕著な東西走行のゆえに、河川が直角に折れ曲がって、部分的に東西方向へと流れることも生じている。

しかしブータンにおいては南部山地の東西走行が顕著でなく、河川はおおよそ南の方向へ流れている。また全体の険しさのゆえか、ミッドランドの谷あいにあたるものにも特別大きなものはなく、並行して南流する河川の中流部に並ぶ、いくらか開けた程度の河谷となっている。これを中央の谷々と呼んでおく。標高にはばらつきがある。主なものは、ハ(約2700m)、パロ(約2300m)、ティンブー(約2500m)、ウォンディポダン(Wangdhiphodrang)からプナカ(約1300m)、トンサ(約2200m)、プムタン(約2700m)、タシガン(約900m)などである(図6)。

## 2) 気候・植生と居住

次に気候についてみると、ブータンは、湿潤ヒマラヤともいわれる東部ヒマラヤに属している。インド亜大陸をおおう夏季の南西モンスーンは、東部ヒマラヤにおいては、ベンガル湾から北、あるいは北北西に吹き上がるものとなるが、これの影響する期間は、ヒマラヤ全体を見れば、ベンガル湾に近い東部ほど開始時季が早くかつ終了時季が遅い<sup>6)</sup>。その結果、アッサムの諸山地や東部

ヒマラヤは世界有数の多雨地帯となっている。ブータン南部山地の南麓でも、年間8000ミリに達するほどの降雨量が記録されている<sup>7)</sup>。

自然植生は、湿潤な気候を如実に反映している。そして大まかには、もちろん高度に従って変化している。とはいえ、降雨パターンがさきに見た地形の影響(図4)を受けているため、南から北へといくつかのゾーンに分けて考えた方がよく、たとえば中尾・西岡は、「熱帯のインド国境」「照葉樹林帯」「中流部乾燥河谷」「中央部耕作地帯の谷」「針葉樹林帯」「高山植物帯」「国境のヒマラヤ主脈」の7つに識別して説明している(中尾・西岡 1984:9-17)。

この区分をさきの地形との対応でいえば、ドゥアールは「熱帯のインド国境」、南部山地は「照葉樹林帯」、中央の谷々は「中流部乾燥河谷」と「中央部耕作地帯の谷」をあわせたもの、北部山地は「針葉樹林帯」(一部は「照葉樹林帯」の上部)、北部高地は「高山植物帯」から「国境のヒマラヤ主脈」に、おおよそ相当している。

以下、居住状況にも若干ふれながら、個々の地形ゾーンの気候や植生の概要を述べておく。

### 1: ドゥアール(Duars)

ベンガル-アッサム平原につらなる平原部である。ここの領有をめぐる、英領インドとブータン間で生じたドゥアール戦争によって、ブータンはこのほとんどを失った。この平原部は標高数百mの熱帯植物のゾーンに属し、サラソウジュ、ボダイジュといった樹木類が中心で、ヤシ類、竹類も繁茂する。ドゥアールとは門戸を意味し、主要河川をつくる峡谷の出口が冬季に減水した際、そこが、インド側からブータン・ヒマラヤへの入口となっていた<sup>8)</sup>。

マナス鳥獣保護区にみられるように野生動物も多い。マラリヤの危険もある。以前は、ドゥアールの居住人口はさほど多くなく、ベンガル-アッサム平原に住む少数民族が、比較的小規模な集落を散立させているにとどまっていた。

現在、ネパールのタライが開発・入植の対象となっているのに似て、産業・都市開発の中心地となりつつある。

## 2: 南部山地

南端など標高の低い部分は熱帯植物のゾーンに属し、また標高3000mを越えるような山々は針葉樹林帯に属しているが、南部山地にもっとも多く広がっているのは照葉樹林である。おおよそ、これは標高1000から2500m付近にあり、常緑広葉樹のカシ類、シイ類のほか、シダ類、サトイモ科の着生植物が多い。

南部山地、とくにその南面では、夏のモンスーン中数カ月は、昼夜に限らずずっと霧に巻かれて雨が降るような天候が続く、ほとんど晴れることがない。野生の猛獣も多く、また山ビルの巣窟ともなる。

南部山地全般において、集落や、農耕、牧畜が存立しうる場所は、山稜や山間の緩傾斜地に限られる傾向があった。とくに急峻かつ多雨の南部山地の南端面では、今世紀初頭ころからの「ネパール人」の定着以前は、大規模な集落はあまりなかった。現在でも山間の切り開きに家屋や耕地の散在する様子がみられる。

また、ブータンではツェリ (Tsheri) と呼ばれる焼畑が行われるのは、おもに照葉樹林のゾーンである。

## 3: 中央の谷々

ブータンの人口の多くは、おおよそ標高 900から2800m程度の温帯ゾーンに住んでおり、その中心をなすのが中央の谷々である。ここは、水田や畑が谷間を中心に山腹にも広がり、農耕にすぐれた地域となっている。これらの谷々は、おおよそ照葉樹林帯から針葉樹林帯の下端に相当する標高にあるが、ブータンの中では自然林がもっとも少ない地帯となっている。とはいえ全体としては、ネパールのミッドランドよりも森林ははるかに多い。

中尾氏らが「中流部乾燥河谷」と呼んだものは、中央の谷々の中でも、とくにその標高の低いところの河岸に、局地的にあらわれる乾燥地のことである。顕著な例は、ウォン・チュー (Wang Chu) 川中流域、ウォンディボダン、タシガンなどにみられ、しばしば全く樹林を欠き、灌木、草が散在するが、地面が露出した所が多い。

一方「中央部耕作地帯の谷」は、歴史的にも重

要な役割を果たした代表的河谷、パロ谷、ティンブー谷、プナカ谷などの、乾燥度の点ではもう少し穏やかで、谷あいの農耕の盛んなところを指している。谷を分ける丘陵地の森林には二次林も少なくなく、赤土の上に松林の広がるところが多い。また、斜面には家畜の踏み跡がしわのように刻まれている。

## 4: 北部山地

標高の低いところには照葉樹林があるが、もっとも多いのは針葉樹林である。これは、照葉樹林帯上限 (標高約2500m) から樹林限界 (標高約4000m) まで広がっている。ツガ類、モミ類、を中心とし、しばしばサルオガセがまわりつのが見られ、やはり濃密な森林となっている。シャクナゲ類の群生する所もある。上部ではカンパの類も少しある。北部山地は急峻でかつ自然林がよく残っており、熊などの野生動物も多い。とくに、針葉樹林帯上部 (標高3000~3600m付近) での居住はほとんど見あたらない。

## 5: 北部高地からヒマラヤ主脈

針葉樹林限界の標高は、谷の違いや斜面の方向の違いによって少し異なり、低めのところでは3800mくらいだが、高めのところでは4100mを越える。この樹林限界付近の河谷、斜面には定住限界集落がある。このあたりから上には氷河地形がひらけ、「高山植物帯」の広々とした草原があらわれる。高山植物の種類も多い。

大きな氷河は標高4600m付近にまで舌端を降ろしてきている例もあるが、平均的雪線は標高5200から5300mである。このゾーンはほとんどがヤクの放牧地となっており、標高5000mを越えても、草のあるかぎりヤクの踏み跡や糞が確認される。

なお、このゾーンの北、ヒマラヤ主脈を越えたチベット側は、ブータン側の高地よりもはるかに乾燥した緩傾斜の地帯となっている。もっとも顕著な植生の違いは、草地における草の密度が小さく、樹林限界以下でも斜面をおおう針葉樹林帯がないことにあり、ブータン側の「緑の世界」にたいして「茶色の世界」といえるような景観を呈している。

さて、ブータンの気候全般を考えたときに最も

図7 年間降水量記録の例



注目に値するのは、国の中央部に東西に並ぶ谷々の乾燥である。これら中央の谷々は、地形のところに例をあげたミッドランドの谷あいであり、周囲の高い山稜に比べると乾燥が激しく植生も貧弱で、特に顕著な例であるウォンディボダン周辺では、その景観の違いは強烈である。ネギ (Negi) の著書に添付されている植生図でも、マツを中心とする植生として、明確に現れており、気象データからも、乾燥の度合を確認することができる (図7)。実に、年間降水量が1000ミリにも達しないほどである<sup>9)</sup>。

ブータン全体の湿潤、そしてそれを反映した南部山地と北部山地のうっそうとした森林のあいだにあるだけに、こうした谷々の乾燥は、特筆に値する。

この乾燥気候や乾燥植生の成因については、毎日きまって昼ごろから夕方にかけて規則的に吹き上がる山谷風、人為の影響などが、これまで指摘されてきている。しかし、地形のところにふれた、ブータン南部山地の高さが、南から吹き上がるモンスーンの雨の大きな障壁となっていることも、一因を成しているであろう<sup>10)</sup>。

その他、植生で目につくこととして、北向き斜面では植生が豊富で南向き斜面では貧弱である、という一般的現象がある。これはとくに、中央の谷々や北部高地では顕著であり、日射条件と関連

すると思われる<sup>11)</sup>。

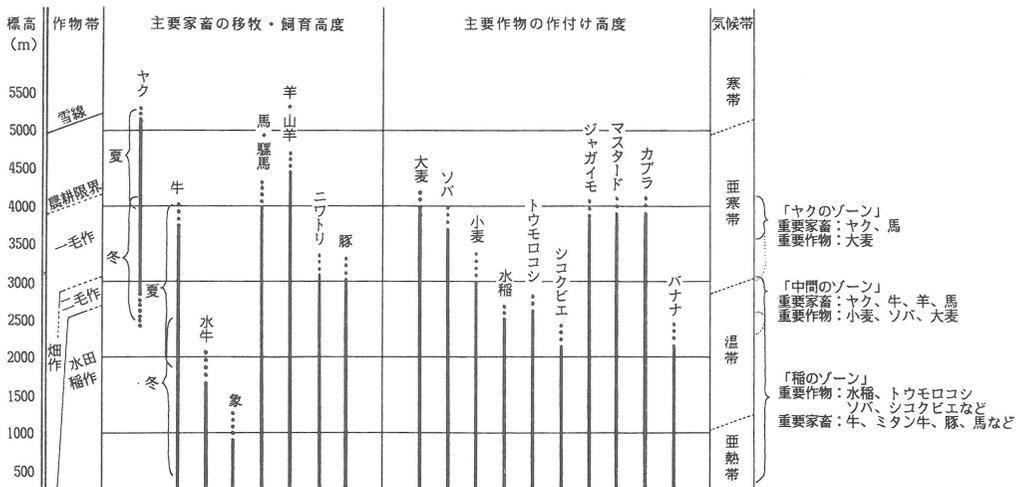
以上みてきたように、地形の上では南部山地が急峻で高く、中央の谷々でも大きな盆地はないこと、気候・植生の上では全体として湿潤で自然林もよく残ってはいるが、居住地帯の核となってきた中央の谷々は意外なほど乾燥していることの2点が、ブータンの自然条件の大きな特徴として、確認できると思われる。

### 3 生業様式の垂直構造

ヒマラヤに住む諸民族の伝統的な生業は、大きく、農耕、牧畜、交易の3部門に分けられる諸生業の複合であったことが知られている。このうち農耕と牧畜は土地利用景観に直接反映しており、高度によってダイナミックに変化する。これは踏査したブータン西北部においても確認でき、総じて高度が上がるにつれて、農耕から牧畜へと生業の力点が移っている。あきらかに、高度による自然条件の変化に影響されているといて良いであろう。

交易については、後述のように、ブータンではこれの専門的発達の度合いは小さく、住民は農・牧生産中心の生活をおくっているといつてよい。すなわちブータンでは、個々の地方や集落の、食料生産や労働力確保のうえでの経済的自給性は、かなり高いと思われたのである。

図8 ブータン・ヒマラヤの生業の垂直変化



そこで、農耕と牧畜の重要さの度合いという点に着目して、観察や聞き取り、文献の情報によってえられたブータン西半部の住民の生業様式の高度的整理を試みると、およそ三つのゾーンに分けうることがわかった。それらは、集落の高度の高いほうから順に、ヤクのゾーン、中間のゾーン、稲のゾーンと名付けることができる。概要は次の通りである。また図8には、主要農作物の作付高度範囲、家畜の移牧・飼育高度域などとあわせて図示を試みた<sup>12)</sup>。

重要家畜：ヤク、牛、羊、馬  
重要作物：ソバ、大麦、小麦

3:稲のゾーン

(集落の標高約2500m以下)

水田稲作地帯  
生業の中心は水田稲作  
住民の性格：農民的  
重要作物：水稻、トウモロコシ、シコクビエ、ソバなど  
重要家畜：牛、豚、馬、驢馬など

1:ヤクのゾーン

(集落の標高約3600から4150m程度)

一毛作の畑作地帯  
生業の中心はヤクの移牧  
住民の性格：牧民的  
重要家畜：ヤク、馬  
重要作物：大麦

2:中間のゾーン

(集落の標高約2500から2900m程度)

二毛作が不可能でもない畑作地帯  
生業は畑作と牧畜の複合  
住民の性格：半農半牧民的

ただし、踏査した範囲はブータン西半部であり、特に徒歩で歩いた部分は、中央部河谷からヒマラヤ主脈(標高1300~6800m)であった。しかもその日数の大半は、北部高地で過ごしている。このため、とくに南部山地の比較的標高の低いところでは、ここで低所を一括した稲のゾーン以外の類型(例えば、稲以外の作物の焼畑や根菜採集と牛牧畜の複合したゾーン。おおよそ、稲のゾーンの下部の森林の多い地域)をも設定したほうが妥当である可能性もある。つまりここでの識別は、中央の谷々以北を主眼にしている。

各ゾーンの集落高度にはある程度の幅があり、

また、同程度の高度の集落でも、生業の内容にある程度の違いは有る。この作物帯によった区分の仕方は、川喜田氏らの方法にならったにひとしいが、妥当と思われる<sup>13)</sup>。

なお、適当な事例を実見できず、高度域の限界を明確に確認できなかったところもある。とくに中間のゾーンの上限（二毛作上限）が明確でないが、これは、標高2900m以上の場所での集落、耕地は、標高3600から4150mでしか見ておらず文献資料もほとんど存在しないことによる。すなわちこの高度は、比較的険しい北部山地のなかの針葉樹林帯がほとんどであったのであり、集落や耕地を発見できなかったのである<sup>14)</sup>。図8にも、こうした高度分布限界の細かな点に関する問題が少なくないのだが、本稿が試みる概要把握には充分かなう。

### 1) ヤクのゾーン

ヤク移牧中心の一毛作畑作地帯である。このゾーンに属する集落は樹林限界付近に位置する。南から近づくと、北部山地の濃密な針葉樹林の道をたどりながら標高をあげて、樹林限界が近づき、傾斜がおちて、ひろびろとした氷河地形が広がるあたり（おおよそ標高3600m以上）になると、緩傾斜地や河岸段丘上に、このゾーンの集落がぽつぽつと現れることになる。

実見した集落の標高は、標高3600から4150mである。典型例は、リンシ (Lingshi)、ラヤ(Laya)、ルナナ (Lunana) の3地方に見られる。

住民たちは、集落から雪線に至るまでの、広い高山放牧地でのヤク移牧に重きをおいた生活をしており、一般のプータン人は、ヤクを追う高地住民のことを、ジョップ (bzhop) とかブロク・パ (*brog-pa*、チベット語のドクパに同じ、以下本稿で斜体で記したスペルは、チベット文字のアルファベット転写である) とよんでいる。しかし彼らも、牧畜のみに携わるいわゆる遊牧民ではなく、固定家屋と耕地のある母村<sup>15)</sup>では大麦を主作物とする農耕（一毛作）も行っており、結果として、穀物耕作の限界が定住集落の限界ともなっている。日常の主食は、大麦を煎って粉にしたツァンパである。

このゾーンの集落景観は、おおよそ以下のよう

に描写できる。

日当りのよい緩傾斜の山腹かU字谷の平坦地に集落がある。集落が立地している北西側には、冬の季節風を避ける意味からか、高山があることが多い。家屋は比較的密集している。家屋の形式はプータン一般のものとはさほど変わらないが、壁は石造りが普通で、ルナナでは草の付いたままの地面を板のように切りとったものも材料にしていた。一般的に高さは低地のものより低く、低地の家にみる最上階の吹抜けはない。窓はほとんどなく、屋根はチベット式の平屋根ではなく傾斜のある板葺きである。

家畜や野生動物の侵入を防ぐために、家屋の周りは、時には畑も含めて石垣で囲っている。家に近づくには門や梯子を経なければならないことも多い。2階建ての場合、住居は2階であり、1階は馬などの畜舎となる。チベット仏教徒であるため仏間もある。家の脇にはやはり石垣で囲まれた菜園がある。耕地は、ほとんど母村の家屋の近くに集中している。

高地民の集落の背後には、比較的標高の低いところではまだいくらか林があることもあるが広大な草地が広がっており、そこが、ヤク群を追っての、移動するテント生活の場所となっている。ところによっては、この放牧地に小屋がつくられていることもある。集落の下方や対岸、あるいは少し下流に降りたところには必ず森林があり、そこで燃料となる薪や建築用材が採集されている。樹林限界を越える集落では、家の屋根、床、柱に用いる材木は、樹林帯で採集して運び上げたものである。ヤクの糞はチベットでは貴重な燃料であるが、プータンでは多雨で乾きにくいいためもあってか、燃料としてはほとんど使われていない。

1戸あたり、20から100頭ほどのヤクを所有している。大部分の牡ヤクは去勢され、荷役用となる。ヤクは、それ自身が商品となるほか、実に様々な利用されている。

ヤクは、ヒマラヤではおおむね標高3000m以上を、移動の高度域としている。低地では、弱ってしまうのである。ヤクの分布範囲はチベット高原全域に広がっているが、近年行われたチベット側からのチョモランマ峰登山では、なんと標高6500mの氷河上のキャンプまで、ヤクが荷を運んだ例

があると聞く。これほどの高さは、もちろんふつうには上がることはない高さだが、われわれが歩いたところでも、雪線間近の標高5200mくらいであっても、草のある場所ではヤクの踏み跡や糞がよくみられ、夏の放牧中にはこのあたりまで上がってきていることが知られた。このように、ヤクは、高地の草を好み、寒冷に強い家畜である。

ブータン西北部の場合、ヤクは、夏の間は標高4200mから5000m前後の標高にあるテントを拠点として高山放牧地に放される。ヤク牧民は、テント生活をしつつ、放牧地をまわる。冬は母村の周辺の低地まで下ろされる。季節的な垂直移動のリズムに従った、放牧様式といえる。移動のルートはほぼ固定しているようで、放牧地やそこにある小屋などの施設の所有や、他者の使用に際するきまりについては、牧民たちはたいへん気を使っている。利用できる放牧地の範囲は、村ごとに決まっており、その互いの境界は、標高が高いところでは、放牧用キャンプ地の背後をなす峠などに選ばれている。こうした村境付近は、谷あいの集落を中心とした生活圏の縁辺ではあっても、良好な放牧地などとして利用価値がしばしば高く、住民たちは、かなり厳密な地理的境界意識を持って

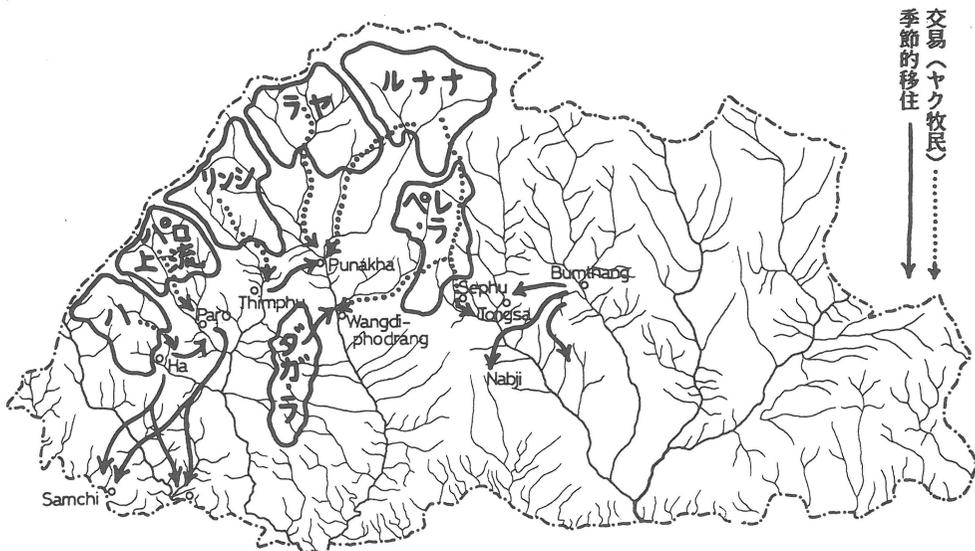
ることが珍しくない。

他の家畜としては、馬、騾馬、羊、牛、鶏などを見ることもある。馬、騾馬は駄獣として使われる。しかし、どの家畜をとってみても、ヤクほどには経済的重要性を持たず、頭数も多くない。住民は、ヤクの肉、乳製品を最も好んでおり、更には、経済的な意味あいを越えて、歌に歌われ、語り継がれるといった具合に、文化的な意味を持つほどにヤクと住民の結び付きは深いのである。

高地民たちは、以上のような牧畜にあわせ、大麦を主作物とする、母村での農耕を兼業している。大麦に次いで重要な作物は、マスタード、ソバ、ジャガイモ<sup>16)</sup>などである。主食は、大麦のツァンパであるが、交易によって低地から得たソバや米が見られることもある。野菜としては、カブラ、ダイコンなどがある。

こうした農牧兼業のほか、低地に出かけての交易もなされている。これは、収穫を終えた、秋から冬にかけて行われ、高地の産物と交換に、米や茶など、低地で入手可能な生活物資を補完的に得ている。地方ないし集落群ごとに、交易ルートは決まっている(図9)。牧民たちは、世帯ごとに、おおよそ、年に最低一頭のヤクを、低地の人に売

図9 ヤク牧民の交易ルートと中央の谷々の住民の季節的移住ルート



っているようである。ヤクは標高2800m以下の農耕地帯まで降ろされてから屠殺されていた。ヤク一頭は、値段の上では、350から700キロの米に相当し<sup>17)</sup>、こうした目安によっても、ヤクを低地民との交易のために屠殺することの経済的意義の大きさが知られる。たとえば300キロの米があったとすれば、4～5人の世帯なら、1年を通じてほとんど毎日のごとく、3食のうち米食をはさむことができるようになるのと略算できるからである。牧民は、干し肉、乳製品、ヤク・ウールなども売って、替わりに米、塩、茶、唐辛子、石油、乾電池、ゴム長靴などを手に入れていた。

こうした交易でも、物々交換はふつうに行われており、金銭経済の発達度合いは小さい。もっぱら交易に携わっている人はまずなく、世帯ごとに、農耕、牧畜、交易という生業部門のどれかに専門化する傾向も小さい。即ち、世帯内で、例えば、農作業や機織りは主に女がやり、薪取り、交易は男がするといった分業が見られても、世帯別にはさほど行われていないようであった。交易・輸送業を専門にするものなどはないのである。そのため、住民は、複数の地点で必要な種々の労働を、世帯の中で分担しつつ、農耕、牧畜、そして交易までを、複合的に、しかも高い自給性を持って、経営しているといつてよい<sup>18)</sup>。

それでは、われわれが接する機会の多かったラヤとルナナの住民について、いくぶん断片的で少々長くなるが、具体的に記しておきたい。ラヤ、ルナナともにブータン西半部におけるヤク移牧のセンターといってもよいところであり、ヤクを追う高地民の居住地の中でも、パロヤティンブーといった中央の谷々とのつながりが濃く思われたチョモラリ周辺やリンシ地方にくらべ、文化的な個性が強いように感じられたところである。

### (1) ラヤ地方 (Laya: 標高3800m)

ラヤ地方は、ラヤのほかにルンゲーともうひとつ集落をあわせた3つの集落からなり、全体でひとつのギャップ (Gup=村長、チベットのゴパGo-paないしゲムブにあたる) がいる。北に横たわるヒマラヤ主脈にはチベットへぬける峠 (トマ・ラ、ワジュ・ラ) があるが、これもかつてはヒマラヤ越えの交易路の一つであった。南のガサへと森林

地帯をとおって下る道は、冬季には降雪によって数日間不通になることもあるが、長期にわたって閉ざされることはないらしい。

ラヤの集落は、モ・チュー (Mo Chu) 源流、標高3800mの山の中腹の緩傾斜部に位置する。集落の上手には草の斜面が広がり、下方には大木の残る疎林があつて、薪を取るという対岸にはもっと濃密な森林が残っている。家屋は石造りの壁をもち、人が住むのは2階で、1階には家畜 (特に馬) を入れる。作物は、大麦、ダイコン、カブラ、マスタード、ジャガイモなどである。小麦はないと聞いた。家畜はヤクを中心とするが、そのほかにも低地への交易の輸送に使う馬があり、牛もすこしみられる。

住民は、13世紀に僧の予言に従ってチベットから移住してきたという伝承をもつらしい (NHK取材班 1983:234)。ブータン全域をよく歩いている観光公社 (Bhutan Tourism Corporation) のスタッフたちも「ラヤの言葉には半分くらいチベット語が混じっていてわかりにくい」という。確かにラヤの女の人たちは髪を長くのばし、キラとは異なった衣装を着て、頭には竹でつくったトンガリ帽子をのせている。男性の衣装でも、ゴとは違った独特なものがある。衣服の素材はヤクのウールである。

短髪でキラを着た稲作地帯の女性と比べると、ラヤの女性はまったく異民族のようにも思える。同じヤクを追う高地民であるリンシ地方やルナナ地方の人々が、ブータン一般の人とほぼ同じ服装をしているのと違う。

チベット人の婚姻形態についてしばしば指摘される一妻多夫婚も、この地ではそれが半分以上を占めると聞いた。

村人のひとり、キンレー・ドルジ氏に1年の生活サイクルを教えてもらった。彼の世帯には父、妻、子供4人に娘婿があり、自分を含めて8人の世帯である。ヤクは20頭、馬5頭、バジュとよばれる高地の普通牛のメス1頭、耕地は1エーカー (約0.4ha)、また2カ所にヤクの放牧地をもっている。

家畜の数だけでみるとどうやら裕福ではない。というのは、ラヤでは1戸あたりヤクをふつうは30から50頭ぐらいはもっており、それ以上保有す

る例もとくに珍しくないからだ。また各戸では、毎年秋に自家用ならびに交易用に、あわせて2、3頭のヤクを殺したり売ったりするが、彼の場合は昨年(1984年)は殺していない。

彼のもっているふたつの放牧地(ノギラ)は、クルカとナンゴである。それぞれラヤから、ヤクなら1日行程ほどのところにある。クルカはマサ・コン川の標高3700mくらいの地点にあり、ここにはノーチムがある。ノーチムは、冬に家畜をつれて滞在するための小屋のことで、石造りの壁をもち、屋根は、板のうえに土をおいた平屋根であり、ラヤの家主の割板を並べた傾斜屋根ではない。しっかりした副住居で、家財道具もかなりそろっている。もう一つの放牧地、ナンゴはラヤの集落の上手にある。こちらは標高4000mを超えるらしい。ナンゴは夏放牧地で、小屋も採草地もない。ヤクを放牧する夏の6月から9月(旧暦5から8月)には、生活用具や食料を家畜の背に乗せて運び上げ、テントを張って滞在する。

こうした放牧地の所有と利用のあり方は、ラヤの一般の世帯にも当てはまる。各戸はラヤ村に家と畑地を持っているほか、ノーチムのある放牧地、ノーチムのない放牧地をおおよそ最低一つづつは所有している。ノーチムのない放牧地は比較的標高の高い場所で、夏の時期にヤクの毛で織ったテントを設営してヤクを放牧する。標高5000mくらいの草地でも目にする小さな円形の石囲いはこのテントの設営地であり、村人は、乳加工用の道具、薪などを、ヤクと共に運んでこれらの放牧地を訪れるのである。

ナンゴでの夏放牧の時期、豊富な草を食べてヤクはよくふとり、乳もたくさん出す。放牧地では、ヤク集め、乳搾り、バターやチーズなど、牧畜生産の一連の作業にたいへん忙しい。一方、家主のあるラヤの畑では大麦、マスタード、野菜などが育っていて、老人などが留守番して世話をしている。またクルカでは冬のための飼料作物が育っている。テントでつくられる乳製品は、ラヤに定期的に運びおろされる。

秋、とくに9月から10月(旧暦8から9月)になると、ラヤ地方は最も忙しい時期となる。ラヤの畑では作物の収穫や麦の脱穀がはじまり、それが終わると、つづいてクルカで飼料作物の刈り入

れである。世帯メンバーは、ラヤとクルカとナンゴのあいだを行ったり来たりする。

放牧地にいる人手も収穫に必要になり、この収穫期が始まるにあわせ、ヤクもいったんラヤの近くまで下ろされる。しかし、ヤクはながくても3週間ほど村にとどめるだけですぐクルカへ移す。麦を刈り取ったあとの畑では刈り跡放牧もなされるが、村中のヤク群が一度にラヤの近くに集まると、食べる草などのさまざまな問題がおこることが、ヤクを長期間止めおくことのできない理由のようである。各戸のヤク群の移動は、共同的なとりきめに従ってなされるらしい。

ヤクをクルカへと移動させるころ、ラヤの畑をたがやし、大麦やマスタードを播きつけておく。これらの仕事がようやく終わる10月末から11月にかけて、ラヤでは秋の村祭り、ローレ(新年の祭)が行われる。そのあと、各家の、とくに男たちはガサ方面(ガサ、タムジーなど)へ荷運び用の家畜をつれて交易に下りる。ヤク、乳製品などと交換に、米、塩、唐辛子ほかの生活物資を入手するのである。ゴム長靴、手袋、懐中電灯、電池、タバコなども、高地民にとっては魅力のある品物だ。

冬の間(旧暦8、9月から4月)ヤクはクルカにとどめられる。ノーチムのなかには家畜を入れるスペースがあり、夜にはとくに子ヤクなどを入れる。春先には新しい子ヤクも生まれる。雪融けが遅いと、飼料が乏しくなるシビアな季節である。高原の雪の消える4月ごろになると再びラヤ地方には春が訪れ、ラヤの畑では冬まめに播いた作物も背を伸ばし始める。ヤク群は再びラヤ、ナンゴへと徐々に上げられる。都合、ヤク群の大きな移動は年に4回で、クルカ→ラヤ→ナンゴ→ラヤ→クルカである。

ラヤの人々はヤクにたよって生きている<sup>19)</sup>。彼らの生活は「ヤク」に満ちている、とっていい。ヤクの毛は衣服、ロープ、テントとなり、皮からは靴、革ひも、ミルクからはバター、チーズがつくられる。そして肉は、干し肉や腸詰め加工される。これらはすべて、日常生活にいかされ、また交易品にもなっている。そしてヤク移牧のリズムにあわせながら、耕作や交易もうまい具合にそれに織り込んでいる。ヤク群には毎日人がつかねばならず、複数の土地で同時並行的に仕事が

進行する。そのため、ラヤの人が一家全員そろって顔をあわせるのは、秋祭りのときくらいしかない聞いた。

## (2) ルナナ地方 (Lunana: 標高3600mから4150m)

ラヤ地方の東側に位置するルナナ地方は、ウォチュ (Woche) からタンザ (Thanza) までにいたる多くの小集落からなり、ラヤと同様、全体で一人のギャップがある。プータン・ヒマラヤの高峰の多くが、この地方の北辺に位置している。

プータンの中でもルナナはまさに孤立した辺境で、外へ通ずる道は、すべて標高5000mを超す険しい峠をもち、一種の盆地状を呈する地方となっている。ポ・チュー (Pho Chu) のゴルジュに沿ってプナカに下る道も、何十年にもわたる工事にも関わらずまだ開通していないし、11月から5月くらいまでは、すべての峠は降雪のため閉ざされてしまう。いくつもの峠が、ラヤ、プナカ、ニカ・チュー、プムタン方面とルナナ地方をつないでいる。チベットに通ずるガント・ラもあるが、たいへん険しいので、かつてでもそれほど多くの交易があったとは思えない。たとえばウォード (Ward 1966:498-499) は、かつてはガント・ラ (Gonto La, 標高5350m) を越えるルートからチベットと交易して、塩、中国茶、衣類などを得ていたが、当時から交易は、プータンの中央の方をより指向していたはずと記している。

ポ・チューの谷あいの各集落は、ラヤの場合でもそうだが、日当たりがよく冬の北西風を避けられるような、南向き、東向きの場所に立地している。

タンザの人は、プナカから植民してきた (Olschak 1971:18) といわれる。服装でいえばたしかに、ルナナの女の人はラヤのような特別な衣服ではなく、キラを着ているし、トンガリ帽子ものせてない。男はゴを着ており、長身で身体つきのよい人が多い。ルナナの人の気性は、われわれの会った高地民の中ではもっともフランクで荒っぽく、中央政府の権威が行きわたっていない印象を受けた。

また、ルナナはその孤立性のゆえに貧しい地方だとも聞く。たしかに、ラヤと比べるとバターな

どの物価は高いし、衣食住全般において、生活はラヤよりもだいぶ貧しく思えた。

ここでも作物は大麦が中心で、周囲の高山放牧地を利用したヤク移牧が行われている。主食はもちろんツァンパだが、交易で得たソバ粉も多くみられる。

大麦の収穫は9月末から10月初めである。根刈りした後にさらに穂だけが集められ、麦わらは子ヤク・牝ヤクの冬の飼料として貯蔵されていた。穂は家の庭で乾かされたのち、再び戸外でからさおで打たれ、風選されていた。粉にひくためには水車小屋がある。

牧畜に関して最も目を引く点は、ルナナには馬も牛もないことである。高くきびしいまわりの峠を、それらの家畜は越えられないからだと聞く。したがって家畜はほぼまったくヤクを中心とし、ごくわずかの山羊・羊と、低地から運ばれた鶏がわずかにあるくらいである。

ラヤでは多くのノーチムを見た。それは、越冬用の副住居であった。しかし、ルナナではそうした越冬用の堅固な小屋はみかけなかった。タンザから2時間ほど上流の台地の上 (標高4500m) には小屋がたくさんかたまっていたが、どれも小さく、荒っぽく積んだ石の壁に割板をおき、さらに重石をのせて屋根をつくった、簡単に夏にしか使わないものだった。小屋が密集していたのは、付近が共同の放牧地だったからだろう。ルナナでも、夏の放牧ではヤクの毛で織ったテントが使われてはいるが、小屋の使われ方という点では、ラヤのヤク移牧とはいくらか異なった様式をもつように思われた。

ルナナ全体は盆地状を呈しているため、夏季は周囲の高山の放牧地でヤクを放牧し、冬季は村落の集まる谷の中へ降ろしてくる。主家とならんで簡単な小屋があり、麦わらはそこに保管されている。タンザ付近では、真冬には積雪は1m近くになることもあるらしい。子ヤクや牝ヤクは、家に隣接した畑を利用した囲いの中や畜舎の中に入れて麦わらを与えるが、種牡のヤク、去勢ヤクは屋外に放しておくのだと聞いた。ヤクは雪が降っても平気で、雪の下の草を掘りだして食うのだという。

1984年10月下旬、上部ルナナの各戸がウォンデ

イボダン (Wangdiphodrang 標高1300m) 方面に交易に出かけるのに同行した。これに対し、下部ルナナの諸集落はガンジュ・ラ経由でプナカ方面へと向かうと聞いた。縁起の良い日が出発日に選ばれ、留守番の人をのぞき、各戸から人手が出てきていた。一斉に降りていったが、数百頭の飾りをつけた去勢ヤクが群れをなした。上部ルナナの主要な集落、チョゾ (Chozo)、テンチー (Tyenchee) タンザ (Thanza) はそれぞれ20から30戸の世帯があり、一戸あたり数頭のヤクを出しているだけでもかなりの数にのぼる。ヤクに頼らず人の肩だけで荷物を運ぶものの中にはあった。

大群の荷運びのヤクは、秋の降雪も気にせず道をかきわけて進んだ。ヤク肉やヤク・バターを運んでいたが、さきに行った方がよい値を取れるのか、競争しながら下りて行った。交易先のセフ (Sephu、標高2600~2900m)、ウォンディボダンの近くになると、ヤクは、ペレ・ラ (Pele La、標高3350m) 付近の尾根上へと連れて行かれて、最終的には交易品は人の肩で運ばれた。

セフのあるニカ・チュー (Nicka Chu) 川上流や、ペレ・ラ付近の放牧地 (標高3000~3800m) は、これより早い時期には牛や山羊・羊の群れが放牧されていて、放牧地の使用時期をうまくずらせているのがみられた。

更に秋が深まると積雪が増えて峠が通行不能になるため、ルナナの住民は低地で交易を済ませると再び帰途につく。低地で得る交易品は、ラヤの場合と特に変わらない。

## 2) 中間のゾーン

移牧と畑作とを複合するが、ヤクのゾーンよりも農耕においてより豊かなゾーンである。

このゾーンに下ってくると作付け可能な農作物は増え、集落にはかなりの広さを持つ畑地が目につくようになる。集落の例としては、ハ、ガサ (Gasa、プナカ谷モ・チュー上流)、セフ (Sephu、ニカ・チュー沿い)、ブムタンなどがある。

ヤクのゾーンの広々とした景観とは、若干ことになってくる。比較的地形の開けた中央の谷々に位置するハやブムタンはともかく、ガサやセフでは、周囲を森に囲まれた傾斜地に、家屋と傾斜畑が広

がっている。ヤクのゾーンの集落と異なる最大の点は、集落よりも上手に濃密な針葉樹林があることで、両ゾーンの中間をなすこの森林地帯は、一種の無住地帯となっている。家屋配置のうえでも、定住限界付近の集落に見られたいくぶん集村的な家の配置は見あたらず、はるかに散村的になってくる。

住民は農民の性格を帯び始める。ソバと大麦ないし小麦といった組合せで二毛作も可能となっているところはあり、ヤクのゾーンの比べて農耕に投入する労働は増えている。しかし稲作は不可能であり、牧畜の果たす役割はまだ比較的大きい。主食においても、ツァンパ、ソバの比重が大きい。

ヤク移牧は消滅するわけではない。ハ (標高約2700m) やブムタン (標高約2700m) では、リンシ、ラヤ、ルナナほどでないにせよ多くのヤクがあると聞かれ、一部の、ただし決して少なからぬ住民が、ヤク移牧に専門的に従事していることが知られている。われわれが訪れたニカ・チュー谷の集落セフ (Sephu、標高2600~2900m) の場合でも、ヤク移牧が住民一般の生業の中心とはどうもいいえないながら、一部の村人はヤクを保有していた。ガサ (標高2800m) の場合は、「ここではヤクは病気にかかるので一晩しか滞在させることはできない」と聞き、ほとんどヤクを飼っているようすはなかった。だから、このあたりの標高では、村々にどのくらいヤクが保有され、冬季にどの標高までヤクがおろされるのかについては、地域による違いが大きいと思われる。しかしとにかく、このあたりの高度では、冬にはヤクをおろしてやることも不可能ではないのである。

たとえば、ブムタン地方にて冬季に標高2400mあたりまでヤクの群れを下ろす例を、1969年京大隊が記録しているが、これなどは、ヒマラヤ南面ではもっとも低くへおろす例の一つといえるほど、標高の低さでは珍しい (桑原(編)1978:172)。

しかし重要なのは、ヤク以外の家畜、特に牛<sup>20)</sup>が加わってくることである。またブータンでは地域に限られるが、羊の有名な産地であるハ、ブムタン、チェンデジ (Chendebji、標高2600m) なども、このゾーンに属していることが多いと思われる。これらの家畜はみな、やはり山地移牧の方式に従って季節的に放牧地の標高を変えなが

ら飼養されている。

このゾーンに属する集落で実見したものは2、3しかなく、かつ通過したのみであったので、諸生業の複合の実態については詳しく報告できないが、農耕の比重が高まり、ヤク以外の家畜が加わってくる結果、住民の生活が常にヤクと隣合わせにしているという、ヤクのゾーンに見られた色合いは薄れている。また、集落ごとあるいは世帯ごとに、移牧する家畜の種類や数がある程度選択されており、違いが大きいに思われる。しかし、農耕と牧畜が複合的に経営されていること自体は、ヤクのゾーンと変わりが無い。

冬季の活動として住民が低地に移住してしまう現象が、このゾーンでは起きているところがある。その例として、ハ（標高約2700m）とブムタン（標高約2700m）の方面の例をあげておく。括弧の中は、文意等から筆者が補ったものである。

「（ハの人々は、ハは、）冬の生活には適さないという。ここの人たちは冬になると暖かいブンツォリン（標高約400m）などに移り住むらしい。」（桑原（編）1978:101）

「（2月11日、ハ谷に到着。）……サムチヤドーナ（プータン南西部国境の地名）へ向かう道に入ったが、この道は西部プータンやパロから（インドの）平原部に行くのにふだんよく使われているとみえ、よく整備されてもいる。サムチへと向かう多くの人とすれ違う。ハヤパロの人々は、（牛や羊の）群れをつれて冬にはサムチへ移住するようだ。（しかし、その低地からハヤパロの、賦役としての輸送に携わる人も多らしい。）……2月12日、（ハ谷を下流へと歩く。）いくつかの美しい村を通り過ぎる。……人々はサムチへ出かけており、家々には人気がない。景観は全く異様である。麦ワラの山、施肥するために積み上げたモミの葉、松の木の薪の山、こうしたものがあるのに、ハトの群れ以外には、数マイルも歩くあいだ生命の息づかいを感じられないのだ。……ハのゾンベン（県知事）の住家である、Ha Tampienに近づくにつれて、黒羊、ヤク、牛の大群が雪線の下で放牧されているのに出くわした。」（Eden 1972(1865):77-78）

「（ブムタンの）チョイキさんの家は、（ブムタンに）20平方キロ（？）のソバ畑を持っている。暖かいトンサには4平方キロ（？）の水田があり、これは長兄夫婦が耕している。まずまずの暮しだという。冬が近づくと家畜とともにトンサへ移り住むという。この地方の人々はほとんどがこうして二カ所に家をもっている。ティンブーヤパロの人はブナカかブンツォリンにもう一軒の家を持っている。

（ウォンチュックさんの家族は、）ブムタンに20

アールのソバ畑を持ち、……この他に南の暖かい地方に、12アールの水田と4頭の牛を飼っている。この家では現金収入がほとんどない。ブムタンの暮しには今でも現金がいらぬのである。生活必需品の砂糖と塩だけは、手製のバターやチーズを売って手に入れるという。まずは完璧に自給自足の生活なのである。……

（秋のソバ収穫が終わると、ウォンチュックさん一家は、）畑をもう一度鋤き起こし、冬麦をまいて11月にはブムタンをはなれる。戻ってくるのは来年春季、この間家畜と共に暖かい土地で半年をすごすのである。」（NHK取材班 1983:262,277-278）

「ブムタン地方では、秋にソバを収穫したのち小麦や大麦をまき、盛夏の前に収穫、再びソバをまくという二毛作をしている。

ブムタンの人には、ヤクも牛も多数持っている人があるが、夏季はヤクは高山の放牧地で、牛はブムタンの近くの放牧地で放牧している。冬季はヤクをブムタンのあたりまで降ろしてきて、牛は低地へと移動させている。このような場合、家族が分かれてヤクと牛の世話をしている。中には牛しか持たない人もいて、そういった場合は家族皆が牛と一緒にトンサ地方へ降りてきている。

トンサ地方のナブジ村（Nabji、標高不明だがトンサ（標高約2200m）よりもかなり標高は低い）では焼畑農耕によって、陸稲、トウモロコシ、ソバ、シコクビエなどを作っており、家畜は各戸で十数頭から数十頭の牛を飼っている。

冬になると、ナブジ村には米のできないブムタン地方の人が降りてくる。彼らのなかにはナブジ村に家を持っているものもあり、また、ナブジ村の知人の所に移り住むものもいる。しかし、耕地は持っておらず、耕作権もない。ブムタン人は、ヤクの肉などと交換に、ナブジ村で産する米などを得ている。ヤクは、ナブジ村までは標高の関係で降りられないが、ブムタン人のもつ牛の放牧地はナブジ村にもある。つまり、一部の放牧権は持っている。」（Karma Dorji氏（1985年当時31才、トンサ県出身、観光公社ガイド）のご教示による）

「秋の訪れとともに、（ブムタンの人々は、）……夏牧場で肥えた家畜を集め、越冬用の低い谷間に畜群を移動させはじめる。あらゆるプータン人は活気に満ちた活動を始めた。

……突然私の行手に混乱がおこった。……砂ほこりの中から姿を現したのは牛の大群だ。……

牛飼いの家族たちもやってきた。女も子供もお婆さんも、てんでに荷物や背負っている。……家族全員がこうして冬の生活の場所へと、牛を追いつつながら、ゆっくりと日数をかけて移動をしていく途中なのだ。

プータン人の生活は、夏と冬と、半年ずつを一周期とするリズムを作っている。夏は涼しく、冬は暖かい所へ移る。だから、上流階級はあちらこちらに館を持っている。別荘ではない。しいていえば、そ

のどれもが別荘だ。一年中同じ場所に住むブータン人は上流では一人もいない。……王様から牛飼いまで、同じリズムの生活だ。

……高山帯のヤク飼いの、中央部での牛やジャツサム(ジャツサム)を飼っている連中も、みんな上下のトランスヒューマンスをやっている。そして特にその必要のない王様や高官たちも、やはり昔ながらの快適な習慣に従っているのだ。

しかし、ブータン人はモンゴル人と違って、家畜だけに頼って生活しているのではない。稲や麦を作っているから、定住生活の必要もある。放牧と農業が職業的に分かれていたらまだしもだが、大部分の家族が両方を兼業しているのでは話は複雑になってくる。

いまのブータンで、理想的な生活は、暖かい水田地帯に越冬用の家と田、涼しい麦作地帯に夏用の家と畑、それに牛の群れといっしょに移動するためのテントや仮小屋を持って暮らすことだ。だがその理想が達成してくると、家族は二、三カ所に分かれてちりぢりになってさびしく暮らしている。快適な生活も何かの犠牲がいるということだ。」(中尾 1971: 222-224)

### 3) 稲のゾーン

南部山地山間の緩傾斜地や中央の谷々などに広がる稲のゾーンは、森林のある山地から流れ落ちる水流を利用しての水田稲作を中心とした、農耕地帯である。西部部ではパロ、ティンパー、プナカなどが代表的であるが、こうした中央の谷々以外のところでは、照葉樹林を切り開いてつくられ、そして今でもまわりを森に囲まれている小さな村々を見ることができる。照葉樹林帯では、夏季にはヒルが出るため、森林の中の道に家畜をいれることは好まれない。

西部ブータンでの水稻栽培限界は高く、世界最高所における稲作の例であるといわれている。中尾・西岡(1984:112)は、ほとんど標高2700mまで達すると指摘する。実見したところでも、水のえられる谷あいであれば、ほぼ標高2400mあたりまでは確実にといつてよいくらいに、ひろく栽培されていた<sup>21)</sup>。

集落内の景観は、おおよそ以下のように描写できる。集落は水田の近くに立地する。家屋が数戸ずつかたまり、それが谷底、山腹に広がっていて散村的である。家屋は普通3階建てくらいの、かなり大きなものである。屋根は割板を葺いて石でおさえてある。最上階の吹抜けは穀物貯蔵所となる。普通2階が住居として使われている。窓は少

なく、火床ではつねに火が焚かれている。1階は家畜小屋となっていることが多い。壁はしばしば土をつき固めて作っている。家の周りには、土塀、木の柵、竹を編んだマットなどで囲まれていることが多い。家の近くの菜園や耕地もこれらの柵で囲われている。家の周りには牛、馬、豚、鶏がいる。なお、比較的貧乏な家やプナカなどの標高の低い地方では、竹を編んだマットを壁や屋根に用いている場合もある。

住民は卓越した灌漑水路の造成技術を持っており、数キロも離れた谷川から等高線に沿うように引かれた灌漑用水路は少なくない。部分的には竹や木をくりぬいたトユまで使われている。

パロ(標高約2300m)の農事暦の報告例(NHK取材班 1983:126)にも見られるように、夏の水稲栽培とその裏作である小麦の作付けなどが農事を中心になっている。

このゾーンでは稲以外の穀物も豊富であり、農作物は大変充実している。耕地と集落が集中するのは、既述のとおり、比較的乾燥した中央の谷々である。パロ、ティンパー、プナカなどでは、谷底のごく一部の平坦地を越えて、耕地、集落は、山腹の緩傾斜地を選んで広がっている。まとまった広さを持つ水田景観は、まさに穀倉地帯であることを実感させるものである。もちろん住民の生活は、農事を中心に成り立っている。

このゾーンの中心的な家畜は牛である。各戸でふつう、数頭から十数頭は牛を持っている。そのほかに、犁を引かせるための牡牛、馱獣として使う馬や驢馬を数頭もっているし、家のまわりには豚や鶏もよくみられる。なかにはヤクや牛を多数所有している家もある。牛の乳利用は、高地におけるヤクと同じようになされてはいる。しかし、ほとんどの集落が立地する標高2400m以下では夏季はヒルも多く、水田近くには多数の牛を放しておけないことも普通で、集落近くの疎林の山や遠く離れた山の放牧地で放されている。やはり、夏は高地、冬は低地という移牧がなされていて、冬にはヤクの降りてくる標高2700から3800mあたりの放牧地には、夏の間は牛を放すところもあったことは、既述の通りである。

食生活を見れば、主食は米であるがバターやチーズは唐辛子や塩とならんでおかずの味付けに欠

かせないし、チベット式のバター茶も日常的に飲まれている。良好な乳を出すミタン牛（およびそれと牛との一代雑種ジャツアム）は別格だが、この稲のゾーンの人々でさえも、一般の牛よりヤクの乳製品を好んでいる。また肉としては豚肉の消費量ももっとも多いが、ヤクの肉は良質のものとして好まれており、こうしたヤクの肉や乳製品への嗜好が、ヤクのゾーンの住民との秋の交易をうまく成立させてもいる。

さて、このゾーン（のとくに上部）においても、さきにもみた季節的移住という巧みな高度差利用が行われている。以下はパロ（標高約2300m）やティンブー（標高約2500m）での、それに関する事例である。

「パロでは、12月から2月にかけて巡礼や買い出し、避寒を兼ねて、インドや南ブータンに出かける人が多い。……この季節にはパロの人口の半分くらいがいなくなってしまう。」（西岡 1978:52,55）

「（パロの）家々に牛はいるのだが、そのほとんどが畑を耕すための雄牛で、雌牛を飼ってミルクを毎日しぼっている家は、ごくわずかであった。実は各家では雌牛を持っているのだが、その牛は低地に住む人との共有の場合が多く、冬の間（十月～四月）は低地の人が飼い、五月になると放牧しながらパロまで上がってきて、それ以後夏の間はパロの人のものになる。だが、パロの村に近いところでは放牧する草地がなく、また牛が水田の水を飲むと病気になるので、パロより高地の標高二千七百から二千八百メートルの所で放牧しているのである。その（夏の）間はバターやチーズは自分達（パロの人）のものになるのだが、（放牧地とパロでは）往復に何時間もかかるので、ミルクを毎日家で飲むわけにはいかないようである。

（人手の少ない家では、）人を雇って牛の世話をしてもらっていた。しかし（牧人に）食料と衣類を支給し、そのうえそれらを放牧地まで運ぶというたいへんな労力を必要とした。その割には少しのバターやチーズしか手に入らないようである。

裕福な人たちはヤクも持っている。……夏冬にかかわらずバターやチーズは高地の放牧地からパロに届けられる。

パロの農家の中には、何百頭もの牛やヤクをもち、専属の牧人に世話をさせている家もある。しかし、十頭とか、それ以下の頭数しか持っていない人達が多く、それらの人々は何軒かが一緒になって放牧するのが普通である。

牛の放牧地はパロから比較的近いところにあるが、ヤクの場合は自分の放牧地まで何日もかけて行かねばならないことも多い。……新鮮なミルクが飲めるのは旅行中に放牧地でキャンプを張った時とか、たまにパロの友人達が自分の牛の放牧地へ食料を運

んだ際に持ち帰ってくれる時くらいであった。」（西岡 1978:143-144）

「（ペレ・ラ（標高3350m）の東の草原では、）王様の（ジャツアム）牛を放牧している人たちのテント（四つ）に出会った。……」

この人達は、十日から一か月くらい同じ場所にテントを張って放牧し、次の放牧地へ移動していく。これから寒くなるにつれて低い方へ下がって行くのである。この人達によると、毎年、何月にはどこで放牧すると決まっているとのことである。この広々とした何の区切りもない草原も、田畑と同様にそれぞれの放牧権があって、他の人の草地へ牛を放つことはできないことになっているそうである。」（西岡 1978:138-139）

「ブナカ（標高約1300m）はティンブー（標高約2500m）に住む人々の冬のすみかである。

ティンブーの人達はブナカに冬の家と畑を持ち、秋にティンブーの稲刈りが終わると、家財や家畜を運んだ大部隊で、暖かいブナカの谷へやってくる。そして一冬を過ごし、春になるとまたティンブーへ移ってゆく。」（西岡 1978:133-134）

「ティンブーの人々は何の家でもブナカに家と耕地を持っている。ティンブーでの稲刈りと小麦を播きつけることが終わると、ブナカへ出発する。ティンブーの家財道具、牛、馬、豚などの家畜を全部もって、家には施設して移動する。現在では誰かがティンブーの家に居残ることが多くなってきている。ブナカの水田でも、やはり稲を刈ったあと小麦などを播く。現在では稲の二期作を試みる人もある。ティンブーでもブナカでも刈り取った稲は積み上げておいて、雨期が始まる迄には脱穀してしまう。こうした仕事のため、冬の時期でも双方を行き来することもある。春になるとこれは頻繁になり、裏作小麦の刈り取り、苗代作り、田植えと、再びティンブー、ブナカを往復しつつ農事をすすめる。ブナカにしか家のない人もいるが、こういうのは比較的貧乏な人である。

この移動に関係しているのは、多くの僧侶からなるブータンの政府が、ティンブーを夏の都とし、ブナカを冬の都として、季節的に移動する伝統をもっていることである。住民たちには、政府の役職についている者も少なくなく、また、政府の要求する賦役を果たすためにも、冬にはブナカに移ることが必要でもある。

ブータン語でネップというのは、信頼のおける友人であり、必ずしも血縁関係を持っていなくても、中央の谷々のヤク、牛の所有者とその放牧請負人との関係にあるような間柄をいう。このとき両者は経済的な相互共益関係にあり、例えば稲作農民がヤク放牧地を訪れたときや、ヤク牧民が秋に低地へ降りてきたときなど、互いに宿泊所、食事などの面倒をみてやる関係である（この「ネップ」は、チベット一般における「ネーツァン」に相当するものかと思われる）。

地方の稲作地帯などから、政府の仕事のためにテ

インプーに来るなりして、自分の村で自分の畑や家畜の世話のできない人は、親戚などにその世話を頼んでいる。家畜の世話を専属で行っている牛牧民は、ノウベと呼ばれている。」(前記、Karma Dorji氏の御教示による。)

「低地の人が所有するヤクを高地の牧民に頼んで放牧してもらうとき、そのヤクの出す乳や乳製品は、本来低地の所有者のものとなるたてまえになっている。しかし、ヤクを放牧している牧民は、チーズやバターをかすめ取ったり、あるいは世話の引き換えに分けてもらったり、また、子ヤクが生まれた時にはその一部を譲ってもらったりすることによって、自分の財を増やすことができる。

ヤクを追う高地民たちが低地の農民にヤクを売ることは、毎年のようにみられるが、子ヤクの時点で農民と牧民のあいだで買取りの契約がなされている場合も多い。数年間経て成長したヤクを農民が得るときに、もともと契約したヤクであるかどうかはじゅうぶん識別可能である。農民でも、ヤクの個体の特徴や育ち具合はよく知っているからである。

かりに、稲作地帯の人がヤク牧民になりたいとしたら、それは不可能ではない。放牧地の利用さえできれば、自分自身の所有するヤクが少なくても、人のヤクの面倒を見つつ、時間をかけて、自分の財も徐々に増やすことができる。」(Yeshe Tenzin氏(1984年当時24才、プナカ県出身、観光公社)の御教示による。)

稲のゾーンのなかでも、中央の谷々のようないくぶん開けた谷あいの灌漑水稲耕作ではなく、ナブジの例のように、傾斜地での天水に依存した畑作(焼畑・常畑)を行っているところがある。こうしたところは、南部山地の山間など、稲のゾーンの下部に多い(おおよそ、標高1800m以下くらいと思われる)。この場合、作物には陸稲もあるが、ソバ、トウモロコシ、シコクビエなどが多い。

#### 4) 季節的移住の重要性

以上によって、農耕、牧畜を中心に、高度に従う変化を概観した。どのゾーンにおいても、特定の高度を越えて人が上下に動くことによって、住民の経済は活性化していることがわかる。

これをたとえば、一時的に出張して交易や買い出しにあたることで、高度を越えた産物の垂直的流通がはかられ、特定のゾーンにおける偏りが補われている、と一括整理できればよいのだが、例にみるように、標高の異なる場所との関わり方はそれほど単純ではない。つまり、移動の機能や目的には、単に交易や買いだしというものだけでは

なく、畜群の移牧や低地における農耕という、異なる標高での農牧生産が見られるのである。しかも、その経営の形態は非常に多様であって、地方によってかなりの違いがあるうえに、たとえばパロやプムタンの事例の中にみられるように、同一の地方の中でも、個々の世帯にはそれぞれ微妙な差異があるようである。そのうえ、移動の機能や目的には、避寒や巡礼、あるいは賦役といった、経済的な意義だけでは割り切れないものまでがあげられてもいた。

これらの多様な機能や目的、経営形態の全てを厳密に整理しきるデータと力量は、いまの筆者にはない。個々の事例は断片的であり、この活動を行う背景にある住民の社会関係などについても、無知なることが多いからである。

しかし、事例にみられる細かな違いは、個々の地方、あるいは世帯が抱えている様々な特殊な事情によって生まれていると考えられる。だとすれば、確認しておくべきなのは、個々の事例のもつ特殊事情を反映した細かな差異ではなく、全体に共通してみられる傾向や一般性でなければならない。そこで、やはり、経済を中心に据えた、ヴァーティカルな観点からの整理がまずなされる必要があろう<sup>22)</sup>。

この観点からすると、例にみた家畜の移動の中でも、ヤクと牛という2種類の家畜の移牧高度域の幅の問題や、作物帯の垂直的展開には、やはり注目しなければならない。しかもこのとき、とくに問題にされるべきなのは季節的移住現象であろう。

例にみた季節的移住、すなわち住民の半数かそれ以上にも及ぶほどの人々が冬季に暖かい低地へと引越してしまう現象は、ハ、プムタンなどの中間のゾーンとパロ、ティンプーなどの稲のゾーンの上部でみられた。そこから降りていく低地というのは、サムチ、プンツォリン、プナカなどのほか、ナブジなどトンサ地方南部であり、高度帯の上では、これらは稲のゾーンでもおおよそその下部といってよいであろう。

これに対し、地方としてはほぼまったく季節的移住をしていなかった例は、ヤクのゾーンのラヤとルナナの住民、稲のゾーンの下部のナブジの住民にみられた。また稲のゾーンの下部のプナカには、

比較的裕福ではないらしい世帯のようではあるが、年中そこに住んでいる世帯があった。

このようにみれば、季節的移住を行う例は中間のゾーンと稲のゾーンの上部の高度の集落を中心としており、行わない例はそれよりも高度の高いヤクのゾーンと高度の低い稲のゾーンの下部にある。細かくみれば、季節的移住を行うハ、プムタンという中間のゾーンでもパロ、ティンブーという稲のゾーン上部でも、一部の住民は何らかの理由で冬でも留まっているらしいが、全体としては、季節的移住現象は中間のゾーンと稲のゾーンの上部に集中しているのである。

つまり、A：ヤクのゾーン、B：中間のゾーン、C：稲のゾーンの上部、D：稲のゾーンの下部という4つの高度帯をかりに識別しておくとして、例にみた季節的移住は、BないしCに本拠を持つ住民がDにも住居や耕地をもって冬にはそこへ移住することによって、BないしCの地域ではそれがかなり広く見られるようであるのに対し、AないしDに本拠をもつ住民は、年中そこへ定着している傾向が、BないしCの住民よりも強いのである。

季節的移住を行う例と行わない例とを対比的に考えれば、当然のことながら、相対的に、前者は生産に利用している高度域が広く産物も多岐にわたるのに対し、後者の利用高度域は特定の高度帯に留まり産物も限定的である、と予想される。こ

れを、牧畜と農耕にたちかえって確認しておこう。

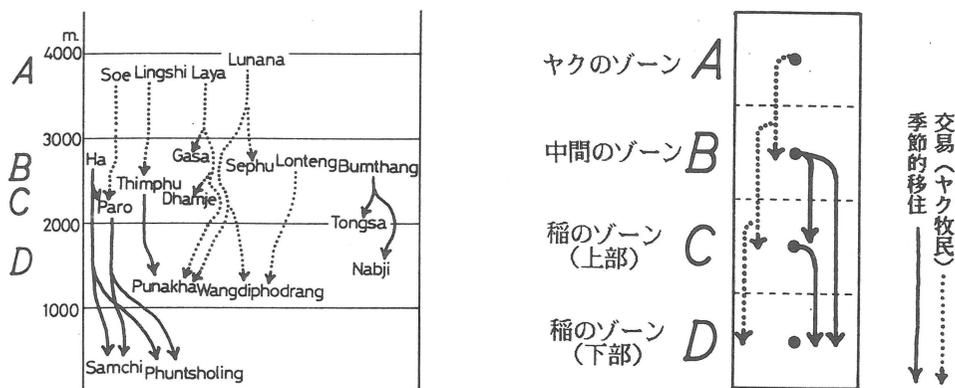
事例によれば、ヤクの群れと牛の群れは、ゾーンを問わず、夏には高地、冬には低地という山地移牧の方式によって飼養されていると、おおよそ考えてよさそうである。

ラヤルナナの住民が秋から冬に行っていた交易は、一部のメンバーが、一時的に低地（B、C）に降りるのであったが、そこでは去勢ヤクなどの駄獣だけをつれており、主たるヤク群の移動は伴っていなかった。冬の間、ヤクは集落周辺の標高3500m位までしか降りず、ヤクに本来的に適した高度域（A）に留まっているといえる。

また、プナカやナブジに住んで季節移住をしない人々の所有する牛の群れの移動高度についてはほとんど情報が無いが、夏冬とおして、おそらく牛に本来的に適した高度域（DのみあるいはそれにCを一部含む程度）に留まっている可能性は高い（夏冬で家畜の世話と所有を交換するパローブンツォリンの例は、Cの住民と関わっていることである）。とくに、牛の中でも、プータン人がたいへん珍重するジャツァムの親畜であるミタンは、稲のゾーンでも比較的標高の低いジャングルが、主たる生息高度域となっている。

これら、季節的移住をしないAやDの住民の例では、一部ないし多くの住民が、移牧にしたがった移動生活をしてきたとしても、その移住や移牧

図10 低地への交易（ヤク牧民）と季節的移住



の高度域は、比較的狭い範囲、つまりAやDの中に留まる傾向を指摘できよう。

牧畜のみならず農耕についても、同様のことはもちろん適合し、彼らの農牧生産全般は、AまたはDの高度域の範囲内に留まるといえるのである。衣食の素材についてもみても、そうした特定の高度の産物への依存性が強いことは、実際に観察される<sup>23)</sup>。例にみたラヤヤルナナのヤク牧民たちの交易は、こうした限定を補う意味で行われていたのである。

しかし、例にみたBやCの高度帯における季節的移住は、こうした限定をはるかに越えた、高度差の大きい環境利用を展開している。これにおいては、低地(D)に家屋のみでなく耕地を所有することもしばしばであったほか、所有せずとも、そこに住む親戚のことが言及されていた。そのため、農耕生産に利用する土地は、世帯内あるいは親戚程度の社会の範囲でも、しばしば、B~DあるいはC~Dの高度域に及んでいる。

さらに、BやCの住民においても、例にみたようにヤク群や高山放牧地の所有は存在し、世帯メンバーの一部を放牧に当てたり、あるいは共同で、ネップと呼ばれる互酬的關係を結んだ特定の牧人に面倒を見てもらう例があった。しかも、標高2400から2700m程度の冬放牧の下限ぎりぎりまで下ろされるヤク群は、彼らの所有するものであった。

つまりこの場合、同じくヤクの移牧であるとはいっても、ラヤヤルナナ(A)のヤク移牧より、下限において明らかに幅広い移牧の高度域を持つ

ているのである。そこでは、世帯メンバーや村人の一部が、冬でも集落付近に残留してこれの世話に当たっていた。

BやCの住民が冬季に低地へ移住する際に連れていたのは、ヤクではなく牛の群れである。彼らが下りるところは、稲のゾーンでも比較的標高の低い、暖かいところ(D)であった。そこでは、例にみた通り季節的に放牧地の使用権を交代させるなどして、低地での放牧権まで持っていることも少なくないかわりに、冬季の間は家畜の世話や所有は低地の人に移る例や、ヤクの場合と同様に牛の世話をかなり恒常的に親戚や牧人に委託している例もあった。

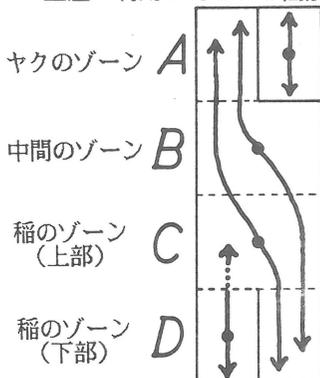
すなわち、これらの住民が低地の移動先に家屋をもって世帯全員で家財道具をまとめて下り、何ヵ月もそちらで住む季節的移住を行うときには、しばしばそちらに耕地まで所有して農業生産にも携わることが多いように推察されるのに比べれば、冬季放牧にどれだけ直接携わっているのかには、個々の地方や世帯ではかなり差がありそうである。各戸がもつ牛の頭数規模も、ヤクのゾーンの住民が持つヤクの頭数規模よりも小さいと思われる。

しかしいずれにせよ、BC両高度帯の住民のヤクも牛も、明らかにAやDの高度帯に留まらず、A~B、B~Dの高度域で移牧されているのである。そして、例にあったように、裕福な世帯ほど、世帯や親戚の範囲内で、ヤクと(低地種の)牛の群れ双方を所有して、つまり2種類の家畜の移牧高度域に関わることで<sup>24)</sup>、彼らの牧畜利用の高度域はAからDすべてに至るほどとなっている。また、特に裕福ではなくとも、共同によってでも移牧を行うべき規模の牛を所有することはふつうであったから、BからDに至る程度の高度域を、牛移牧によって生産に利用していることは珍しくない。

以上のように見てくれば、もちろん世帯ごとの事情によってヴァリエーションも少なくはないと思われるが、先にみたAやDを本拠とする人々よりも、はるかに広い高度域を利用している例がBやCを本拠とする住民には珍しくないことが理解される。

こうした高度差の大きい環境利用の方法は、経

図11. 生産に利用している高度域



済的に有利である。実際のところ彼らは、世帯や親戚という社会の範囲の中で、かなり豊かな農牧生産物を自給的に獲得している。複数の高度帯に農牧生産を広げていれば、特定の高度帯内に縛られた集団を前提に成り立つともいえる、他の高度帯との交易が必要不可欠のものではなくなくなるため、特定の高度帯に留まって補助的的交易を行う例と比べれば、この方法ははるかに積極的な垂直利用といえるだろう。

プナカにしか家や畑を持たない人は比較的貧乏な人たちであるというのは例にみたが、今日プータンで最も貧しい地方は、中南部のシムガン(D)と北部のルナナ(A)であるといわれている。前者はナブジ村に近く、照葉樹林帯での生活の原型をよくとどめ、旧来の焼畑や根菜採集中心の農耕を行っている地方であることは中尾・西岡(1984)によって報告されているとおりであり、季節的移住のごとき垂直利用は事実上知らない地域であった。また後者は、既述のように、高い峠に閉ざされた特殊な高地の盆地内にいるために、半年間外部との接触を確実に絶たれ、ヤクのゾー

ンを越えた有効な高度差利用は行いがたいところであった。

もちろんこうした例に、他のゾーンとの関わりが少なくともなんとかやっていると低い自立性が存立しうることを見いだしてもよいのだが、居住地、耕地、放牧地などを限られた高度以外をもって高度差の大きい環境利用を実行し得るかどうか、経済的にいかに有利であるかが察せられるのである。

さらに、冬に村人の半数以上が移住してしまうほどの大がかりな季節的移住現象が見られる場所は、例のなかだけでもプムタン(とトンサ)、ティンブー(とプナカ)、パロ、ハが知られ、連結する形ででも中部プータンから西部プータンのすべての中央の谷々に存在する<sup>25)</sup>ことが確認できる。これらの谷が歴史的にもこの国の中心になってきたことを思えば、この垂直利用技術の有利性が、プータンというヒマラヤ南面国家の成立する重要な経済的背景となっているさまがうかがわれるのである。

家畜の移牧や作物帯の高度域を振り返ってみれ

図12 鹿野(1978)の整理によるヒマラヤ南面高地東西の移牧の傾向

	西 ←	→ 東
家畜の種類	羊・山羊が牛類と並ぶ重要家畜	牛類が中心 (ヤク、ヤク-牛の一代雑種)
移牧の範囲 (交易用の 駄獣を除く)	羊・山羊においては、より低地の他の地域・民族集団のすむ場所を通過・滞在・利用。 (大きな高度差、長距離を移動)	各々の地域・民族集団だけが利用する比較的狭い高地の範囲内 (小さな高度差、短距離を移動)
移牧と他の 生業の関係	移牧が農業と切り離され、それ自体、あるいは交易と結びついて、専門的な集団によって行われることが多い。	移牧と農業が複合的に経営される (ヒマラヤに普遍的な形態)。 比較的小規模な交易を自ら行う。 (地域によっては大規模な交易を専門的に行う補完的集団がある)
生態学的要因	降雪と貧弱な植生によって、冬季高地には残留しにくい。そこで、牛類より羊・山羊が好まれ、移動が長距離となり、農業と分離しやすく交易と結びつきやすい。	降雨は夏に集中。
歴史・文化的 要因	チベット系民族、中級山岳地帯の集団、インド平原起源の集団が混在。平地起源の集団は羊・山羊を扱うことに習熟していた。	チベット系民族が支配的。 (比較的近年にチベットからきてチベットとの関係が密接だった)

ば、まさにこうした谷々は、ヤク移牧の下限、ミタン、ジャツアムを含め、牛移牧の上部、稲作の上限、畑作でも二毛作がおおよそ可能、といったかたちで、AからDへという、ヒマラヤ南面の高度差の大半を反映するといつて良いほどの、高地と低地の生産に関わりやすい交差的位置にある。

ヤクの冬放牧の下限や稲作上限における、ヒマラヤの中でも珍しいほどの標高限界例をもたらした技術獲得の背景には、こうした交差的位置にある住民の生業上の戦略を感じるといえば、いすぎであろうか。

### 5) 南北に走る経済の帯

ところで、これまで見てきたようなブータン西半部の生業様式における垂直的な経済構造は、他のヒマラヤ南面との比較のなかで行われなければならないであろう。ではそのとき、いったいかななる項目が比較のうえで注目されなければならないのか。

ヒマラヤ南面における生業や移牧の比較は、すでに何人かの研究者のよって試みられている。例えば von Fürer-Haimendorf (1975) は、ネパール北辺に住む数多くの民族の生活の実態を報告した上で、交易を軸にすえて比較している。これによれば、農牧生産とときはなして長距離交易をある程度専門化した例がいくつもあり、交易を大々的に経営しないグループにおいても、農・牧・交の比重は様々であり、同一グループの中でも村落や世帯によって差があることが示され、越冬用の住居や別高度の耕地をもつか否かにも実に様々な形態のあることが示されている<sup>26)</sup>。

また鹿野 (1978) は、ヒマラヤ南面高地 (本稿にいう北部高地) の移牧について分析し、ヒマラヤを東西にみれば、その多様性の中にも東西的傾向が存在することを指摘している<sup>27)</sup> (図12)。

このように、ヒマラヤ南面では、個々の地方、民族、村落、世帯などにおいて、農・牧・交それぞれの比重、その複合がどの集団レベルでなされるか、専門化 (分業化) がどのくらいなされているか、低地に耕地、住居などを所有するか否かなど実に様々な違いがあり、こうした、農・牧・交の分業と民族などの社会集団の関わりの問題、そして、家畜種を含め、生産に利用している高度域

の問題が、ヒマラヤに諸地域の例を比較整理するうえで最も重要な項目であることはまちがいない。

しかし、ここで指摘しておきたいことがある。それは、ミッドランドを中心とし、ヒマラヤ主脈からタライへといたるヒマラヤ南面の高度全体に及ぶ垂直構造が、ヒマラヤの東西で比較される必要があるということである。

高地ではヤクと大麦、低地では稲と牛という違いはヒマラヤ南面一般に広くみられ、高地では牧畜、低地では農耕の比重が高いことは一般的である。そして、こうした高地と低地での産物の差が、なんらかのInter-Zonalな産物流通の方策によって緩和されることもひろく行われているのである。たとえば、より牧民的な人たちとより農民的な人たちの間の交易活動や季節的移住も、その一部をなしているのである。

当然のことながら、こうした経済活動のルートは、高地と低地を結ぶ、ほぼ南北に伸びる帯を形成している。ブータンにおいても、例でみてきた交易、人の移住のルートをつなぐと一定の配列 (図9、図10) がみられ、南北 (高低) の経済の帯は明らかに存在している。これの存在はヒマラヤ南面においてかなり一般的にいえるはずであり、この南北の経済の帯こそが、ヒマラヤ南面各地方の、経済の基本構造をなしているといつてよいと思われる。そしてこれこそが、経済・社会関係の上での、ヒマラヤの垂直構造なのである。

つまり、特定の高度帯や地域に位置する特定の民族・社会集団からみた経営者の観点をとりあえずおいて、さまざまな主体が農・牧・交の生業を営む結果複合的に形成されている全体構造こそが、比較されねばならないのである。そして、単純に想定すれば、ネパールやブータンのようなヒマラヤ地域の国家における垂直構造の大きな中心は、やはりミッドランドにあると考えられ、高度差の大きい季節的移住を伴う中央の谷々の垂直利用経済こそ、ブータンのミッドランドの持つ経済の中心性ではないかと考えられるのである。

以上のような考察にたつて、とくに交易に関わる社会分業の問題や、生産利用空間の高度域の問題に注意を払いながら、他のヒマラヤ南面との比較の上でブータンの特徴を抽出してみたい。

## 6) ブータンの垂直構造の特徴

ブータン西半部においては、中間のゾーン(B)や稲のゾーンの上部(C)ほど、家畜の世話には人に依頼するというようなかたちで、農耕と牧畜が分業化しつつある傾向をみた。たしかに、中央の谷々ほどその傾向がでてきているが、一方で、稲のゾーンの下部(D)をも含めた農耕に優れた比較的標高の低い地域でも、各戸は移牧群に加えるべき程度の頭数規模で、牝牛を持っているのは普通であった。それゆえ、農耕に集中して必ずしも牧畜を志向せずともよいのではないかと思われるような高度でも、各戸の牧畜への志向があるといえよう。ブータン西半部においては、高度を問わず、各戸で農・牧を複合経営する傾向があることを読み取れる。

また、異なる高度帯の産物のやり取り(交易)については、各戸が自給的に生産するか、あるいはその生産の間(とくに冬季)に行われており、世帯間や集落間で交易活動がさほど分業化されてはいない。ブータンにおいては、伝統的には、高地においても低地においても、交易、商売を専業とする世帯や集落はほぼまったく存在しない。近年では、都市生活者が現れ始めた首都ティンブーなどにおいて毎週定期的なマーケットが立つようになり始めたが、伝統的な市としては、年に一度、数日にわたって国境各地で開かれた大市くらいしかなかった。比較的最近までブータン国内に常設商店などはほとんどなく、交易は、住民相互の間のネツプ関係などによって、金銭授受の伴わない形式で行われていたのである。

つまり、ブータンの伝統的な取引(とくに、生活物資の取引)は、そのなされる場所の集中性や定期性にか、インドやネパールの常設バザールや定期市の喧噪とはまったく正反対の、しずけさのなかで行われていた物々交換だったのである。たとえばネパールでは、街道のそこそこに茶店や宿屋、常設商店が発達しているが、ブータンでは、比較的大きな街道でもそれらは非常に少ない。集落景観の中でも、商業取引のための恒常的な空間などはまず見られないのである。

さらに、数少ない常設商店などの専門的商売人も、その多くがブータン人ではないよそ者であっ

た<sup>28)</sup>。現在でも、都市的場所の商店の経営者はほとんどがインド人かチベット人である。こうした外来の商売人に比べ、ブータン人が見知らぬ人を相手に商売するのをいかに不得意としているかは、現代でも多くの旅行記で知られるとおりである。

かつてインドやチベットに部下を派遣して長距離交易を試みたのは、ペンロップ(Penlop、郡長)などのとりわけ有力な社会層であって、それは、政府間交易とでもいえるものであった。こうした際の輸送については、チベットに初めて入った英国使節ボーグル(Bogle、Markham 1876:17)が記録しているように、政府の命があれば、行政単位ごとにポーターや馬を提供し、定められた区間、荷を輸送するというのが住民の義務となっていた。これは現在でも同じかたちで存続している。住民は誰でも、無償で国家のために年何日か働く賦役の義務があり、こういった政府のための輸送が、それに当てられていることは今日でも珍しくない。チベット文化地域に広くあった「ウラ」にあたる賦役であるといつてよいであろう。

カラン(Karan 1967:79)によれば年間2万トンにも達していたというブータンからチベットへ輸出されていた米も、例えばパロの一般の住民がそれぞれ運んでチュンビ谷(Chumbi Valley)のラリー(Phari)で売ったような、ローカルな、比較的限定された範囲内の各世帯(住民の大半を占める自作農たち)の行う輸送によったのである。

伝統的なブータン社会では、専業者とは、鍛冶屋などの職人が存在するのみであったのである<sup>29)</sup>。

次に、農・牧・交を運営する社会集団に着目してみると、ヒマラヤ南面全体において、南北の帯の中で、異なる文化を持つ民族集団が特定の高度域を占拠してとなりあっているのがふつうである。しかし、後述するように、例にみえてきたブータン西半部は、ほぼ全高度にわたって民族・文化的に同一といつてよい集団で占められている。このため、ブータン西半部での南北の経済の帯は、おおよそ同一の民族・文化内で運営されているといつてよい。

ただ、これはあくまで大枠の話であり、厳密にみるなら、実際に個々の地域に支配的な環境利用

活動を行っている社会集団の単位性や広がりの問題が検討されなければならないのだが、残念ながらこれの具体的把握はまだできていない。行政領域や通婚圏、商圈、あるいは方言分布などの文化要素の共有範囲など、いろいろな領域の重なり具合からこれを把握しなければならないが、方言分布や通婚関係の見聞からの印象をいえば、ブータンのなかでは個々の地域社会の独立性はかなり強い。

方言などの細かな違いは、谷ごと、集落群ごとにかなり存在しており、同程度の居住高度においても場所による違いは少なくなかった。また通婚に関しては、たとえばルナナに関してウォード (Ward 1966:501) が指摘したように、それが自らの地方内にほとんど限られているところは、ブータンでは少なくないと思われる。事例にみたラヤの場合も、そうである可能性が非常に高い。その一方で、中央の谷々を占める人々、とくにそこでもっとも多数を占める自作農の人々 (特に政府の仕事にも携わっている人々) の通婚関係は、地域的にも東西南北に広く、社会的にも広いように思われた。たとえば、チベット人やレプチャ族、シェルパ族、「ネパール人」など、現在はブータン国内にすむももとの外国人とさえ通婚している例を見るほどである。つまりおおよそ、季節的移住を行うような中央の谷々の人ほど、やはり、その社会的なつながりは広域に及び、かつ多様な社会の範囲に及んでいると思われる。

次に確認しなければならないのは家畜種を含め、生産に利用しえている高度域の問題であるが、これに関してとくに重要なのは、季節的移住という中央の谷々の住民の行う垂直利用の方式であろう。これにおいては、複数の高度での家屋・耕地・放牧地所有に移牧すべき畜群の所有をあわせ、季節的移住や世帯メンバーの分散、移牧の委託などを実行していたが、特に、移牧高度域の非常に異なるヤクと牛の群れ双方を持つ場合には、ヒマラヤ南面全体に及ぶほどの、高度域を利用しているのがあった。

夏と冬で、高度をかえて住居を転換すること自体は、ヒマラヤ諸地方の民族では、チベット系住民であれ、インド系住民であれ見られることであって、特に珍しいわけではない。そしてそれに、

ヤク、羊などの家畜の移牧がともなうことも珍しくない。また高地に限らず、稲作帯においても、低地種である牛や山羊・羊の群れを飼育するのに移牧のスタイルをとることも特別珍しくもない。

しかし、ブータンの事例にあったような大がかりで高度差の大きい移住を、しかも農・牧・交の分業をさほど行わずに実行することは、非常にまれであると思われる。

鹿野 (図12) の指摘したように、ヒマラヤの西へ向かうほど移牧される家畜が山羊・羊となり、かつ移動の距離が大きくなる傾向がある。こうした意味での高度差・距離の大きな移住という点では、たとえばインド・ヒマラヤのガディ、グジャーール、パッカルワリなどが知られる (一部は牛や水牛を移牧している) が、彼らは平原部の異民族の社会に組み込まれた移牧民族といえるほど牧畜への專業度が高く、他者への経済上の依存度が大きい。しかも特定の家畜種に限定して移牧している。さほど分業を行わない移住という点では、ヒマラヤ南面のチベット系高地民のなかには、農耕にあわせて移牧を行い、しかも夏冬で集落を転換するような例もいくつかあるが、ブータンの中央の谷々の例ほどに、高度差が大きく大がかりなものは管見のかぎりない。

ヒマラヤ南面全体に及ぶほどの大きな高度域の利用を、自らの経済の内部において農・牧・交を統合して実現している例は、権力者層や支配民族など社会のごく上層だけをとれば、他のヒマラヤでも見られないわけではない。しかし、ブータンの中央の谷々の場合は、平均的な世帯でもかなりの程度それを達成している。

つまり、ヒマラヤ南面全体に及ぶほどの大きな高度域での農牧生産と補助的交易を、世帯や親戚程度の小さな社会的範囲の中で自給的に統合している点で、他のヒマラヤ諸地域では考えられないような環境利用の社会的空間的統合 (つまり、社会的にも空間的にも分業されないこと) が、ブータンの中央には実現しているのである。

以上のように確認してきたブータン西半部の垂直構造の特徴を、列記すると次のとおりである。

(1) どの高度をとってみても、世帯内での農牧複合度が高い。特に、稲のゾーンにおいても、比較的規模の大きい牧畜 (おもに牛類の移牧) への

志向がある。

(2) 交易も農・牧とあわせて運営され、交易業一商業の専業発達を見ていない。また交換の形態としては、物々交換が支配的である。

(3) ほぼ、同一の民族・文化内において、南北の帯全体が運営されている。

(4) 季節的移住を行う中央の谷々の垂直利用は、世帯や親戚程度の社会の中で、しかもヒマラヤ南面全体に及ぶほどの高度域を生産に利用している点で、ヒマラヤ地域のなかでも非常にまれな例である。

#### 4 ブータンとその周辺の民族・社会と歴史

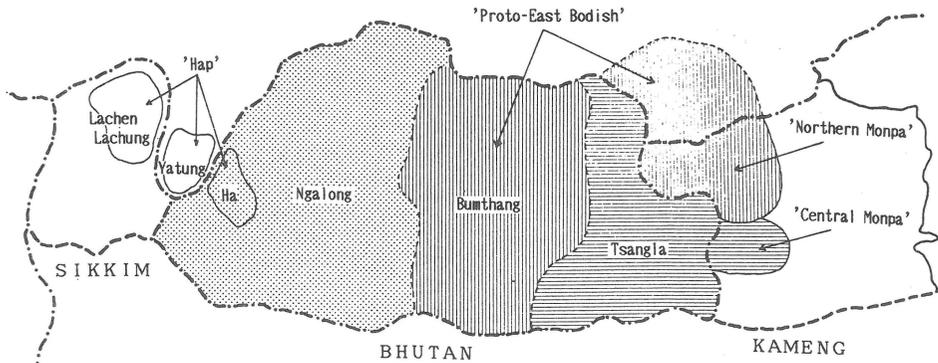
経済的機能を重視して、生産活動に垂直的に利用している高度域の問題と、農・牧・交の分業と民族などの社会集団の関わりの問題を複合的にとらえる観点からは、ブータン西半部の垂直構造の特徴は、上述のように一応整理することが可能である。ところが、このような類例の少ない垂直

構造がブータンではなぜ成立したのか、あるいは、このブータンの事例はヒマラヤ地域のなかでいかに位置づけられるべきなのだろうか、といった疑問には、まだまったく答えられない。たとえば例の中にでてきた、賦役などの、季節的移住があわせて持っていた目的の位置づけもできないのである。

本稿の主たる目的からは若干はずれることにはなるが、このような、起源・伝播論や文化史のうえからブータンの事例を評価するには、現在観察しうる経済・経営形態のみからの把握には明らかに限界があり、ブータンの民族・社会やその歴史が検討されなければならない。しかも、他のヒマラヤ南面諸地域だけを視野に置いておけばよいのではなく、むしろ、インド側やチベット側という、南北との関係性が、注意される必要がある。

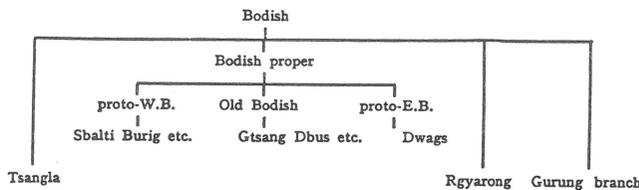
そこでここからは、それらについて一応見ただうえて、ブータンに成立した事例を、ブータン周辺の広い地域の文化史的展開の中で、どう位置づけ

図13 ブータンの民族・言語分布



アリス (Aris 1979:122) の図を一部改変

図14 チベット系諸言語の関係



シェーファー (Shafer 1954) による

るべきかを考察してみたい。

### 1) ブータンの民族

インドに近いブータンの南部には、現在、ライ、グルン、リンブーなどの、もともとチベット系ながらいまではネパール語を話して生活している人たちがいる(道路工事のために滞在しているネパール人労働者とは別である。彼らは、ブータン国籍は持ってないといわれる)。これらのブータン国籍を持つ「ネパール人」は全人口の約4分の1以上を占め、人口増加率もチベット系のブータン人よりも高いといわれる。しかし彼らは、今世紀初頭ころより、南部のサムチ(Samchi)、チラン(Chirang)を中心とする地域に入植したのち居住域を広げた人々であり、本来のブータン人ではない。

「ネパール人」たちが分布する南部山地南面は、かつて悪疫で知られた密林地帯であり、人口密度も比較的低かったとはいえ、彼らが入植する前は、中央のブータン人が耕地、集落をもっていたことも記録されている<sup>30)</sup>。「ネパール人」たちは、彼らに許可をえてブータン南部に住み着いたのである。では、こうした「ネパール人」たちをいちおう度外視すれば、いかなる民族分布がみられるのであろうか。

歴史上、ブータンの政治・文化の中心は、比較的乾燥した中央の谷々にあったが、いわゆるブータン人というのは、そうした谷々に住んでいたチベット仏教を信仰する人々であった。ブータン人の信仰するチベット仏教は、宗派でいうとカギユ派のなかのドゥク派(Drukpa Kagyu)にあたり、チベット語ないしブータン語では、ブータンとは「ドゥク派の国(Druk Yul)」、ブータン人とは「ドゥク派の人(Druk Pa)」である。すなわち、この宗派によって17世紀に統一された領域と人民こそが、ブータンでありブータン人なのであった。ところがこの現在ではアイデンティティーを共有するブータン人も、多様な要素からなっている。

既存の言語学的研究をも検討したアリスによると、この住民は、言語の上で東西方向に3つに大別される(図13)。すなわち、ガロップ(Ngalop)ないしガロン(Ngalong)と呼ばれるブータン西半部の住民の話すガロン(Ngalong)語、ブムタ

ン、トンサ付近の中部ブータンの住民の話すブムタン(Bumthang)語、シャルチョップ(Sharcho)と呼ばれる東部ブータンの住民の話すツァンラ(Tsangla)語の3群である。言語学者シェーファーは、これらの言語をいずれもチベット系(Bodish)とみなしている<sup>31)</sup>(図14)。また、これらの人々はいずれもモンゴロイドであり、形質上日本人にも非常によく似ている。

3群のうち、西半部全体を占めるガロップないしガロンと呼ばれる人たちは、吐蕃王国時代以来、何派にかわたくちチベットから南下して住み着いた人たちの子孫であることが知られ、現在ブータンの公用語となっているゾンカ(=「ゾンの言葉」)語も、ガロン語を代表するものにほかならない。彼らは、3群の中でも言語や形質の上で最もチベット人に似ているといわれる。この人々に比べれば、ブムタン語を話す人たち(とくに、アリスが「Forest Monpa」と記すケン地方やシェムガン地方の住民など。例にみたナブジ村もこれに属する)は、より古い時代から住み着いていた純粹のブータン人とみなされる傾向があり、さらに東のツァンラ語を話す人々も、それに劣らず古い時代からブータンに住み着いていた先住民とされる。これらのことは、アリスなどのチベット学者のほか、ブータン人自身も一般に認めている。

なお、これら3群の話者相互の間では、意志疎通さえ不可能なほどの言語上の距離がある。また、ガロン語がチベット語(アリスによると、とくにすぐ西方のトモ地方、つまりチュンビ谷の言葉)に近いといっても、チベット人一般にはゾンカ語は理解しがたく、その逆もいえる。さらに、おなじガロップの人たちのなかでも、ハ、パロ、ティンブー、ウォンディポタンなどで少しずつ違いが見いだされるように、互いにほぼ理解可能な程度での方言的な違いは、谷ごと、集落群ごとにかなり存在している<sup>32)</sup>。

以上のように、ブータンの主たる住民はほぼすべてがチベット系ではあるのだが、吐蕃王国以来文字をもって仏教を導入し、一つの歴史的世界を形成する主役となったウ・ツァン地方の住民やその言語をさす狭い意味でチベットという言葉を用いれば、その中心からの距離が、さまざまに隔たった住民からなっているといえる。

ただし巨視的に要約すると、こうした、先住民の要素ないし非チベットの要素<sup>33)</sup>が言語の上でより強いのはブータンの東半部、とくにその南部(高度帯の上ではDのゾーン)であり、西半部ではチベットからの影響が比較的濃い群が支配的であって、地域差が存在しても、その違いはガロン語の群の内部の変異に留まる傾向がつよいのである。

とはいえ、言語学的に未調査の孤立した言語も少なくないはずだと言われるブータンだけに、シッキムにおけるレプチャ族にあたるような、チベットとの関連の薄い言語集団は、西半部の中でも、小集団としてであればいくつか存在することは知られている<sup>34)</sup>。

さて、こうしたチベット系住民のほか、アッサム-ベンガル平原に続くドゥアルのゾーンには、メチ(Mechi, Mech)、クーチ(Koch, Cooch)、カチャリ(Kachari)などのポド系住民が住んでいたことが知られており、中央の谷々のブータン人が、そうしたドゥアルの住民を略奪して奴隷として連れ帰っていたことも、英領インド関係の使節等によって記録されている<sup>35)</sup>。たしかに、肌の黒い人たちを中央の谷々でも現在見ることができるが、ブータン人の言語、文化に同化しており、特別差別されているというわけではない。

### 3) ブータンの歴史と社会

ブータンは、チベット世界の影響を受けながら国をなしてきた。チベット世界の社会、文化、歴史の根幹をなすのは、チベット仏教に代表される宗教である。現在のブータン人は、仏教において彼らを理解することはできないと言われるほどに熱心な仏教徒である。チベット史をみれば、それは宗教史といってよいほどであって、宗教が、政治や経済、人の移動と深く結び付いている。そのことは、チベット世界に含まれるブータン史においても読み取ることができる。

チベット語文献の解読にもとづいたブータン史研究は、近年、アリス(Aris 1979)などによって進められつつある。それに従えば、チベット統一の王であるソンツェン・ガンポ(Srong-btsan sGampo, 7世紀)がその領土の各地に建立した

と伝説される寺院が、ブータンには二つ、パロとプムタンにある。遅くとも8世紀頃から、ブータンとチベットの間に交渉があったようである。チベットの王統をひくものが中部ブータンに入るとか、チベット中央から派遣された兵たちがチベットへ帰らず、西部ブータンに住み着くといったことがあったらしい。ブータンは、古くからチベット仏教世界の一角をなしていたのである。

11世紀頃からは、記録に残るチベット仏教諸派が流入し始めている。ブータンに大きな影響を残した僧としては、パジョ・ドゥゴン・シッポ(Pha-jo 'Brug-sgom Zhig-po, 13世紀)、ドゥクパ・クンレー(Brug-pa Kun-legs, 15-16世紀)、ペマ・リンパ(Padma Gling-pa, 15-16世紀)などがよく知られている。

ブータンが現在とほぼ同じ領土に統一されたのは、17世紀前半、チベットから来た高僧ガワン・ナムゲル(Ngag-dbang rNam-rgyal)による。彼は、西部ブータンの主要な河谷に次々と城砦(Dzong)をうちたて、住民の力を借りつつ、幾度も来襲したチベット軍を破った。このドゥク派勢力の動きは、チベット史の中でも大きな出来事であった。

当時は、チベットにおいて、モンゴルとつながりのあったダライ・ラマ5世がポタラ宮殿を建設して、神権政治体制を確立し、吐蕃王国に比肩しうるチベットの大統一をなしとげつつあった。また、シッキムでもチベット仏教宗派の影響を受けて国家形成がなされる時代であった。チベット世界は、宗派が領土を争い、それぞれが高僧を長とした神権政治体制をととのえるという激動の時代であった。

西部ブータンに本拠を置いた彼はシャブドゥンと呼ばれる聖俗両界の長となり、直接、支配の手を伸ばしていなかったブータン東半部、ドゥアル地方などのほか、現在の領土より広い範囲の各地の有力者からも貢物を受ける<sup>36)</sup>。チベット世界におけるブータンの承認がなされ、ブータンはドゥク派の国として政治体制を確立するのである。

各地方に築かれた城砦(Dzong)は政庁であり、かつ僧院でもあった。これは現在においても変わらない。また、シャブドゥンによってつくられた法律は、現在でも国家の法の根本となっている。

この頃は、ブータンがほぼ現在と同じ領土をもった国家として確立した時期であると言えるが、政治経済と関わって興味深い事項もいくつか見られる。以前から関わりのあったドゥアールの政治的な領有を始めたこと<sup>37)</sup>、全土の政治・経済体制が整えられたこと<sup>38)</sup>、ティンブー・プナカ間では、僧侶、政府の季節的移住がなされるようになったこと<sup>39)</sup>などがそれである。

しかしながら、ドゥク派の国として統一されたブータンも、その後の国内政治はとりわけ安定していた訳ではなかった。4～5年ごとに交代した俗界の長、デブ・ラジャ (Deb Raja, Druk Desi) のポストをめぐる、各地の有力者であるペンロップヤゾンベンが争いをつづけ、中央の谷々は、必ずしも常に横に統一されていたのではない。これを強力で再統一したのは、英領インド勢力の支持をえた現王朝の初代国王であったが、多くのブータン人が認めるのは、たとえ国内の諸勢力が争っているときでも、外国の勢力に対しては、かなりの程度ブータン人は一致団結して連合を保ち、それに対処してきたということである。

ブータンに伝統的であった政治体制は、チベットによく似ている。しかし、おおきく異なる点は、チベットでは貴族階級の発達が著しく、聖俗双方の有力な官職を實質上彼らが占有していたのに対し、ブータンではそれほど明確な貴族階級がなく、俗人ないし僧侶の役人の多くが、一般的な自作農の世帯出身の男たちからなっていたことである。カラスコによると、彼らの主たる収入源は、官職に応じて国庫から支給される米などであり、チベットの貴族のような大荘園が世襲的に与えられていたのではない (Carrasco 1959:61-64, 194-206)。

#### 4) ブータン周辺の人口と民族の史的動向

図15は、1981年センサス (ブータンのみは1980年) における県ごとの人口密度を、ネパール東半部からブータンにかけて表したものである。間にあるインド・シッキム州と西ベンガル州ダージリン県も、ヒマラヤの連なる範囲であるので含めている。図作成のもとになったデータおよび周辺地域の若干のデータは、表1のとおりである。

ブータンの統計資料における人口の数字は、水増しされていることが知られ、実際は総人口は

100万人以下ではないかされているので、人口密度値は大きめにでているはずだが、それでもなお、ブータンの人口密度はネパールなどよりもかなり小さい。

この図の南のインド側は、人口密度が高く、平方キロメートル当たり 300人を越えるほど (西ベンガル州全体で615.0人、ブータンの南に位置するジャルパイグリ県では355.7人、クーチ・ビハール県では523.5人といった具合である) なのに対し、北のチベット側は10人にも満たない地域 (チベット自治区全体の値は1.5人) である、とおおよそ考えて良い。そして、ブータンよりもさらに東のヒマラヤであるアルナーチャル・プラデシュ州全体の値は、7.6人 (1981年) である。こうして周囲の状況もおさえて図をとらえれば、次のような考察が可能となろう。

南北について巨視的にみると、ヒマラヤ地域は、位置のごとく人口密度の高いインドと低いチベットの中間の漸移帯となっている。人口密度は、もちろん土地あたりの生産力と関係するはずで、ヒマラヤ内部は北するほど標高が上がるのだから、人口密度は北部ほど下がって当然である。

しかしこの点、東西方向に確認しても、横縞模様の高度帯的構造があることはみだしがたい。たしかにどこでも、おおよそ北するほど人口密度は下がってはいるが、国ないし州全体の値を順に並べれば、ネパール102.1人、シッキム44.6人、ブータン29.1(25.1)人、アルナーチャル7.6人というぐあい、西に高く東に低い。ヒマラヤの部分は、全体的にはインドとチベットの間の漸移帯とも位置づけうるにしても、その内部の東西差があまりに大きいのである。

この東西差の形成に深く関わっているのは、ネパール中部山地における森林破壊と人口増加が、「ネパール人」の東への移住、とくに、マラリヤの危険のある低標高のタライ地区や南部山地への入植を招いてきたことである。この現象は英領インド時代から知られているが、タライ地区の開発・入植は、マラリヤ撲滅や現代国家の進める近代化政策が手伝って、ネパールを中心に近年も急速に進んできた。

シッキムの場合、ブータンと似て17世紀のチベットにおけるダライ・ラマ政権成立期に、チベッ

図15 ネパール東部からブータンにかけての県別人口密度 (1981年)

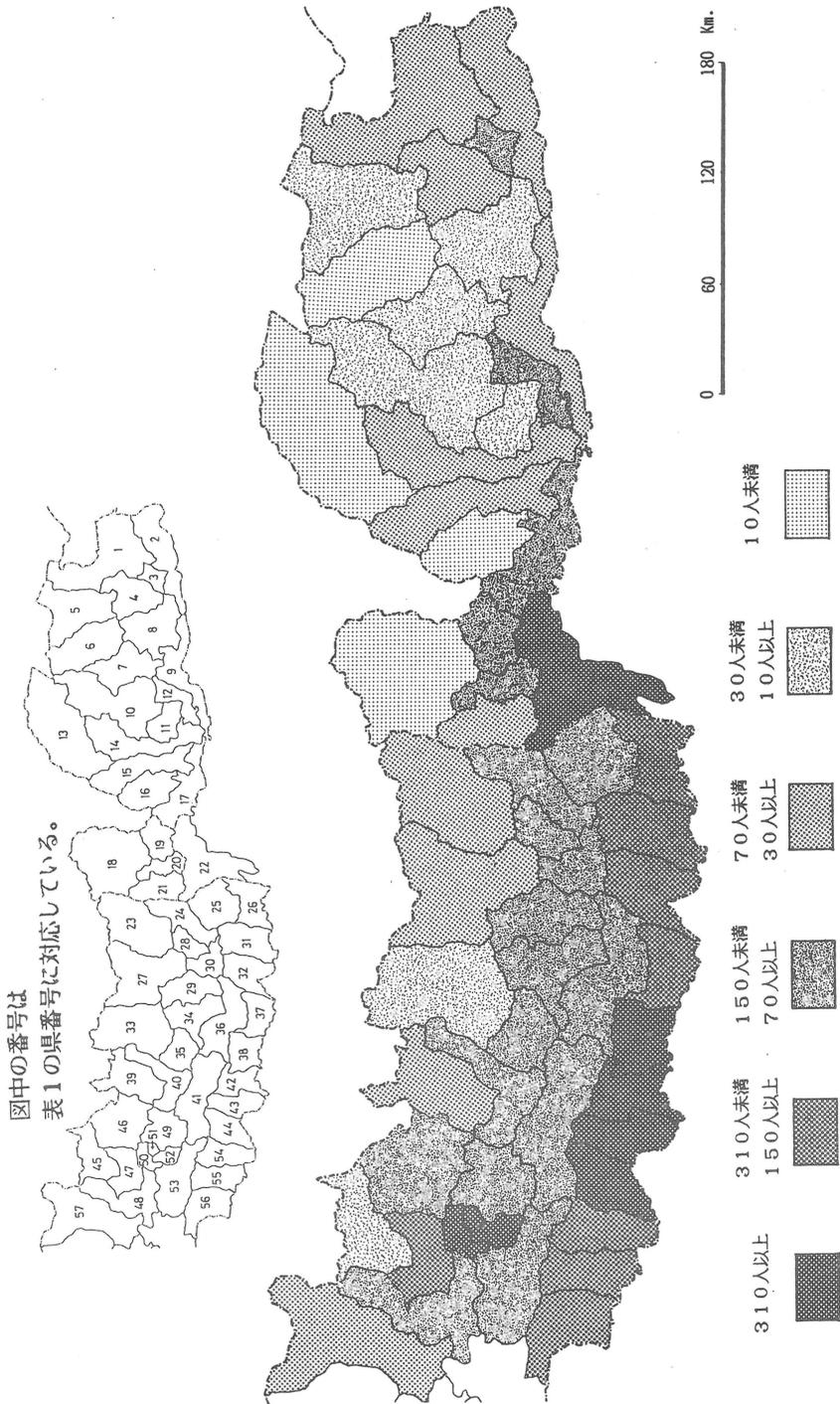


表1 県別の人口と面積のデータ

表1-1 ブータン (1980)

番号	県 (Dzongkhag)	人口 (人)	面積 (平方Km.)	人口密度 (人/Km2.)
1	Tashigang	170000	4260	40.0
2	Samdup Jongkar	72200	2340	31.0
3	Pema Gatschel	35100	380	92.0
4	Mongar	71300	1830	39.0
5	Lhuntshi	36900	2910	13.0
6	Jakar (Bumthang)	23600	2990	8.0
7	Tongsa	28600	1470	19.0
8	Shemgang	43300	2540	17.0
9	Gaylegphug	112800	2640	43.0
10	Wangdiphodrang	47700	3000	16.0
11	Daga	27700	1400	20.0
12	Chirang	104500	800	131.0
13	Gasa	15800	5180	3.0
14	Thimphu and Punakha	94600 18700	2480	38.0
15	Paro	47200	1500	31.0
16	Haa	17100	2140	8.0
17	Samchi	197900	2140	92.0
	合計 (計算値)	1165000	40000	29.0
	合計 (文献)	1165000	46500	25.0

\* 一般のブータン政府関係資料では、ブータン全土の面積は46500または47000平方キロメートルとされるが、資料の合計値はそれより小さい。

資料: Central Statistical Organization, "Statistics at a Glance", Planning Commission, 1982 (?) pp.51-52.  
Central Statistical Office "Statistical Yearbook of Bhutan 1987", Planning Commission, 1987, p.2.

表1-2 シッキム州 (1981年センサス)

番号	県 (District)	人口 (人)	面積 (平方Km.)	人口密度 (人/Km2.)
18	North District	26455	4226	6.0
19	East District	138762	954	145.0
20	South District	75976	750	101.0
21	West District	75192	1166	64.0
	合計	316385	7096	45.0

資料: M.K.Bhasin, "Habitat, Habitation and Health in the Himalayas", Kamla-Raj Enterprises, Delhi, 1990, p.41.(p.31)

表1-4 ネパール (1981年センサス)

番号	県 (District)	人口 (人)	面積 (平方Km.)	人口密度 (人/Km2.)
23	Taplejung	120780	3646	33.0
24	Panchthar	153746	1241	124.0
25	Ilam	178356	1703	105.0
26	Jhapa	479743	1606	299.0
27	Sankhuwasabha	129414	3480	37.0
28	Terhathum	92454	679	136.0
29	Bhojpur	192689	1507	128.0
30	Dhankuta	129414	891	145.0
31	Morang	534692	1855	288.0
32	Sunsari	344596	1257	274.0
33	Solu Khumbu	88245	3312	27.0
34	Khotang	212571	1591	134.0
35	Okhaldhunga	137640	1074	128.0
36	Udayapur	159805	2063	77.0
37	Saptari	379055	1363	278.0
38	Siraha	375358	1188	316.0
39	Dolakha	150576	2191	69.0
40	Ramechhap	161445	1546	104.0
41	Sindhuli	183705	2491	74.0
42	Dhanusha	432569	1180	367.0
43	Mahotari	361054	1002	360.0
44	Sarlahi	398766	1259	317.0
45	Rasuwa	30241	1544	20.0
46	Sindhu Palchok	232326	2542	91.0
47	Nuwakot	202976	1121	181.0
48	Dhading	243401	1926	126.0
49	Kavre Palanchok	307150	1396	220.0
50	Kathmandu	422237	395	1069.0
51	Bhaktapur	159767	119	1343.0
52	Lalitpur	184341	385	479.0
53	Makwanpur	243411	2426	100.0
54	Rautahat	332526	1126	295.0
55	Bara	318957	1190	268.0
56	Parsa	284338	1353	210.0
57	Gorkha	231294	3610	64.0
	その他	(省略)	(省略)	(省略)
	合計 (国全体)	15022839	147181	102.0

資料: Central Bureau of Statistics "Statistical Year Book of Nepal 1987", National Planning Commission Secretariat, HMG, Kathmandu, 1987, pp.8-13.

表1-3 西ベンガル州 (1981年センサス)

番号	県 (District)	人口 (人)	面積 (平方Km.)	人口密度 (人/Km2.)
22	Darjeeling	1024269	3149	325.0
	Jalpaiguri	2214871	6227	356.0
	Cooch Behar	1771643	3384	524.0
	その他	(省略)	(省略)	(省略)
	合計 (州全体)	54580647	88752	615.0

資料: Government of West Bengal Bureau of Applied Economics and Statistics, "Statistical Handbook 1982", 1983, p.13.

トからニンマ派が入って国家が形成された。シッキムにおける先住民はレプチャ族であり、レプチャ自身もある程度はチベット仏教化することになった。しかしここ100年余りの間に、英領インドに割譲されたダーズリン地区を初めとし、カリンボンヤガントック周辺など、比較的標高の低いところには「ネパール人」が多く流入して増え、この勢力が、1970年代におけるシッキムのインド併合を導いたことが知られている。また近年は、ダーズリンでもグルカ・ランド運動など、西ベンガルから独立した政体を望む政治運動を引き起こすまでの「支配的民族」に発展している。

一方、アルナーチャル・プラデシュ州は、ほぼ全体が、他のヒマラヤにおける先住民のごときチベット・ビルマ語系に属する多数の少数民族が散居し、焼畑農耕、狩猟、森林採集などによった比較的孤立した生活をおくっていた。部分的にチベット仏教ないしチベット中央の政権の影響が入ってはいたが、ブータンやシッキムのような広域にわたる国家形成はなされなかった。しかし、南縁部には、やはり比較的最近になって、「ネパール人」が住み着いている。

ヒマラヤは、一般に東ほど湿潤でもともと濃密な森林が広がっていたが、そこでは、チベット系の先住民的諸民族やチベットから南下した住民が散居していた状態であったと考えられる。そして、特に標高の低いところの森林を大規模に開拓するような入植ないし開発は、歴史的にみて一般に東ほど遅れたのであり、ここ1、2世紀ほどの間のそれを中心的に担ったのは、全体的趨勢としては「ネパール人」であったのである。ブータンでネパールなどより自然林がよく残っている事実や、「ネパール人」の人口の割合がシッキムに比べれば小さいということも、こうした人口動態と森林開拓の趨勢の反映として、理解可能である。

これを民族系列という視点から言い替えば、人口密度の分布とその増加や流動の傾向について、チベット系ないしチベット・ビルマ語系諸民族が居住する地域の方に、インドないしネパール系のほうよりも、「寡民」的傾向があったといえる。現代の人口分布図を理解するとき、インドとチベットの人口密度の大きな違いに気を取られると、この東西的傾向を見失いがちであるが、ヒマ

ラヤ地域内での東西傾向をみてその歴史的趨勢を勘案して判断する限り、人口増加は、インド・ネパール系民族ないしネパール化した民族の増加、拡大が、チベット系ないしチベット・ビルマ語系民族の居住地へと浸透していくことで生じている、と解釈することは妥当と思われる<sup>40)</sup>。

これはもちろん、単に、総じて近代というものが持つ人口の急激な増加というものが、インドないしネパール系住民において、チベット系住民よりも早く生じたためといつて良いのかも知れぬ。たとえば、ヒマラヤ地域の人口の歴史的変化を正確に示す資料はほとんどないが、若干の資料(表2)によってネパールとシッキムにおける今世紀の人口調査結果の流れを確認しても、人口密度の程度やその差は、以前はそれほどでもなかったとみなせなくもないし、また、ブータン南部の「ネパール人」に多い、ライ、リンプー、グルンなどは言語的にはチベット系に属すのだから、チベット系とてかなりの人口増加を見せているからである。

しかし、チベット型国家が成立していた地域(たとえばラダックやブータン、シッキム)では、現代でも、チベット系住民の人口増加率が異教徒に比べ、低いと報告されていること、ブータンのライ、リンプー、グルンなどは、長らくネパールという国家の中でネパール化されてきた事情をもつこと、歴史の大きな流れとしてインド系民族とその文化がインド・ヒマラヤから、千年もの時間をかけてヒマラヤを東進してきたことは、民族系列に注目するこの見解を裏付けられると思われる。

## 5 ブータンの垂直構造の位置づけをめぐって

以上のように、ブータンの民族・社会とその歴史や、周辺地域全体のそれを一応みてみると、チベットからの大きな影響をぬきにブータンの事例は理解しえないことがわかる。

ところで、ブータンの垂直構造の特徴である中央の谷々の季節的移住現象は、ブータン東半部に住む、この国の先住民といわれる「Forest Monpa」やシャルチョップ(ツァンラ語話者)の間では、あまりみられないといわれる<sup>41)</sup>。この人々に比べ、中部(特にその北半部)や西部のブータン人は民族的にはよりチベット人に近く、実際少なか

らぬ住民がチベットから南下した人々の子孫であることは、すでに見たとおりである。また、住民の季節的移住現象が、単に自然経済的な意義のみから発生したのではなく、ブータンを統一していた政権の季節的移住の発生・維持や、その要求した賦役の問題と少なからず関係するらしいことは、事例に遡っても確認できる。これらをあわせて考えると、季節的移住現象は、チベットから中央の谷々へ南下して支配的な住民となった人たちがもたらしたにちがいない。

しかしながら、少なからずブータンに南下し、かつここを政治的に統一することになったチベット人たちが歴史上確かにいたとしても、ヤクや羊を追い、ツァンパを食べ、隊商をくんで長距離交易をする商売人、ほこりまみれのチベット仏教徒という、一般に想像されがちなチベット人の生活像からすれば、中央の谷々のブータン人のそれはあまりに遠い。ブータンでもヤクのゾーンでは大麦とヤクが支配的で、生業・生活様式はチベットのみに見えるのだが、中央の谷々だとチベット式のバター茶を飲んだりヤクの肉をつまみながらも米を食うとか、チベット式の靴をはいたままで田んぼに入って稲刈りをするとか、チベット人といえどもとまどってしまうような光景を目にせざるを得ない。

中部ネパールにおいて、川喜田 (1977:70-71) や飯島 (1982:55-64) は、チベット人 (ボテ) は基本的に一毛作帯以上の住民であり、標高約3000m以下になると少なく、2000mを割ると全く姿を絶つと報告している。つまり、二毛作帯以下のチベット人は、いたとしても例外 (この人たちは一般に稲は持っていない) とみなされる一方、二毛作帯以下の、言語・形質の上でチベット系の先住民的な住民 (この人たちは一般にヤクは持っていない) は、文化的にチベット化して、たとえばチベット仏教を信じていたとしても、「トライバル」と整理されるのである。チベット人や「チベット文明」が南下しない理由としては、「チベット文明」を性格づける、ヤク、高地種の羊などが低地へ降りられないことがあげられている。

川喜田氏にある程度ならって、ブータンでは「チベット文明」と対立しうる「同位文明」である「ヒンドゥー文明」が低地に進入しなかったか

表2 ネパールとシッキムの人口密度変化 (人/Km<sup>2</sup>)

年度	シッキム	ネパール
1901	8	
1911	12	38
1921	12	38 (1920)
1931	15	38 (1930)
1941	17	45 (1952/54)
1951	19	56
1961	23	64
1971	30	79
1981	45	102

資料:M.K.Bhasin, 'Habitat, Habitation and Health in the Himalayas', Kamla-Raj Enterprises, Delhi, 1990, p.32. Central Bureau of Statistics, 'The Analysis of the Population of Nepal', National Planning Commission Secretariat, HMG, Kathmandu, 1977, p.24.

ら、「チベット文明」が降りられたのである、チベット系の「トライバル」であったであろう先住民たちも彼らに融合し、文化的にもチベット化してしまったのであるということは、もちろん不可能ではない。また、チベット人の南下やヤクと稲の結合に寄与しえた自然条件を、指摘することも可能である<sup>42)</sup>。

こうした観点からの考察は、無意味なものではない。しかし、ブータンでは、中央の谷々などに住んでガロン語やプムタン語を話す人々は、言語や歴史、チベット仏教、政治・社会体制などを考えても、もともとチベットから来て、いままチベット文化をもつチベット人とみなすことも当然可能であって、とくに「ネパール人」の移住以前においては、ドゥアールに迫る低地まで、ほぼ全体が彼らが占めるところなのであったから、中部ネパールにおける「トライバル」や「ヒンドゥー文明」の高さまで、ブータンでは「チベット文明」が下りていたのである。

しかも、社会の垂直的な棲みわけはブータンでも確かに存在するが、「文明」・民族の枠からいえば、支配的な「ブータン人」の領域がほぼ全体に広がっていた。つまりその枠の内部の社会には垂直的な棲みわけはある程度見られるが、その程度の違いは同程度の居住高度でも少なくないし、国の全体について考えれば明らかなように、垂直的な棲みわけが、水平 (東西) 的な棲みわけに特

に優先して指摘されるべき理由はない。また、稲のゾーンの下部（たとえばプナカやウォンディボダン、ナブジなど）あたりまで下ると、民族・文化の上ではたしかに「チベット文明」をもちながら、「高地種の家畜」をもはや持っていない住民に出くわさざるを得ない。作物帯によって民族が変わるということが、ブータンでは明確ではないのである。

だから、一毛作帯以上の、つまりヤクのゾーンの住民だけをとりてチベット人と呼び、それ以下の土地に住む住民をチベット系「トライバル」としたり、高地種の家畜が降りられないから「チベット文明」は低地に降りられない、などすることは、ブータンではできないのである。

このように、中部ネパールにおいては垂直的な民族・文化の棲みわけを形成する原理をうまく説明すると思われた川喜田氏らの解釈方法が、そのままではブータンでは妥当しがたい。それはなにより、対立しうる「同位」の「ヒンドゥー文明」はおそらくなかったとはいえ、チベット人や「チベット文明」が、ブータンではネパールでの高度限界以下までヤクを手放してでも降りており、また垂直的な民族の棲みわけが、ブータンでは東西に比しても不明瞭であることによっている。

稲をもつ中央の谷々のブータン人とその文化を、チベット人とかチベット文化と呼んでよいのか否かという問題は、もちろんこれらの言葉の定義の問題に由来している<sup>43)</sup>。しかし、ここで明らかになったことは、民族・文化の意味でのチベットの定義の問題であり、一般的に用いられる語義からすれば、ブータン人はその定義の限界的な位置にあるということである。そしてこのことが、逆に「チベット」と「トライバル」の区別を生態学的な境界でとらえうるのかという問題を突きつけているのである。

こうした問題意識からチベット文化地域縁辺部のチベット系諸住民の事例を見てみると、ブータン人のように、仏教などの文化的な意味で、あるいは言語のうえでチベット人とも表現しうる人々でありながら、森林のあるところに住み、稲やトウモロコシを持ち、牛を飼っており、竹の家に住むというような、一般的なチベットの生活像からある程度はずれる生活様式をもつ人々は、チベッ

ト高原周辺（とくに縁辺部の低地）には少なくない。しかもその例は、政治領域としてのチベットの中においても見られるのである<sup>44)</sup>。ブータンのような不都合を生じる例は、実際には少なくないのだ。

どうやら、チベット人（ボテ）やチベット文化という語義から、特定の生業・生活様式や自然条件（生態区あるいは高度帯）を前提することをいったん取り除いたときにはじめて、中部ネパールの解釈例とブータンの民族・文化の広がり的事実の、一見不整合に見える対立を解決する糸口が開けるように思われる。それはまた、川喜田氏の整理における限界を突破しうる可能性でもある。

その限界とは、一言でいえば、中部ネパールという事例の特殊性把握の不十分性にある。つまり、ヒマラヤの東西の中での中部ネパールの位置づけができてないこと、そして、中部ネパールにおける「ヒンドゥー」と「チベット」の、各々の文化地域の中での位置づけが十分なされていないこと、の2点が問題だったのである。

とくにこれらが問題と思われる理由は、1：ブータンがそうであるように、中部ネパールのような民族・文化の分布が当てはまらないような例は、ヒマラヤの中でも少なくないと思われ、その際、それをどう解釈すればよいのかはまだ不明確であること、2：農・牧・交の統合度の高いブータンの生業様式や、チベット高原周辺部の比較的標高の低いところに住んでいるチベット系住民の事例は、チベット文化の基層を捉えるうえでも重要だと思われること<sup>45)</sup>、3：ブータンに限らず川喜田氏のまとめたネパールの民族分布でもそのようなのだが、ヒマラヤ南面におけるチベット系民族の場合、その分布は、二毛作限界線で切れるというよりは、谷の水系に沿ってその限界を越え、いわば、縦じま模様のかたちをとっていたのが一般的であって、高度によるよりはむしろおおよそ水系によって東西方向で違っていてもいいということ、4：事例にみたように、樹林限界を越えたヤクのゾーンであるラヤルナナへの入植に比べ、樹林限界以下の中央の谷々へのチベット人の入植ないし侵入が、歴史的に遅かったと普遍的にいえるわけではなく、この場合はむしろ逆であったと思われること、などがあげられる。

言い替えば、川喜田氏らの先駆的研究においては、東西方向の解釈の図式が、南北に比べて整っておらず、しかもその南北の図式において「トライバル」という例外的存在を設定したがゆえに、たとえ特定のチベット系ないしインド系「トライバル」が、チベットないしインド文化地域のなかで重要な意味をもったとしても、それを汲み上げて、各々の文化地域の中で正しく位置づけられない枠組みになっていたのであって、チベットないしインドという各々の文化地域の内部構造や地域性の適切な把握に支障を来す恐れさえ、ないわけではなかったのである。

川喜田氏は、チベット系民族が谷沿いに上下して異なる高度帯に住みつく場合に生じる、生業・生活様式や社会の分化に注目しすぎたのではないかと指摘すべきは、その分化を生む背景となっている、生業・生活様式におけるチベット系住民の適応性 (Adaptability) だったのではないかと、と思われるのである。

このように、チベットというものの生態学的前提をとりあえず取り除いてみれば、ようやくブータンをチベット文化地域のなかで評価しうる展望が見えてくるが、これと同様のことは、西部ヒマラヤにおける「ヒンドゥー」についてもいえる。つまり、インド世界の中でヒマラヤの諸住民を位置づけうる可能性も同様の手続きによって開きうるのである。

しかし、この観点は、さらにヒマラヤの東西比較にも一つの視点を提供する。それは、民族系列から見た東と西という視点である。つまり、インドとチベットという「文明」の対立に余りに注意を奪われる結果、ヒマラヤ地域を、民族・文化の上でも両者の漸移帯と簡単に片づけてしてしまう (ここでは、横縞模様の高度帯的構造がなかば前提とされ、それと「トライバル」という民族・文化の漸移帯概念が結びつきやすい) のではなく、漸移帯内の東西傾向を、南北の対立をも含みつつ東西に二分しうるインド系と (チベット・ビルマ語系をふくむ) チベット系の民族系列の対置から、把握し得るのである。

周知のとおり、インド系とかチベット系といっても、歴史上国家を形成してきたような住民もあれば、より先住民的な住民もあって一様ではない。

しかし、ふたつの民族系列の住民は、東と西において、ともにヒマラヤ南面全体の高度域を占めるように分布するところがあるのである。

このように考えて、チベット系住民のヒマラヤへの適応例としてブータンとアルナーチャル、インド系住民の適応例としてインド・ヒマラヤあたりを仮に想定しつつ、しかも既述の人口流動の傾向を念頭にいれると、図16のような性格の対比は可能なのではないかと。

こうした民族系列のもつ性格の対比が、実際どれだけ妥当であるのかは問題であり、今後の大きな検討課題である<sup>46)</sup>。とはいえ、チベット系とインド系の両者は、明らかに異質の性格を持っているように思われ、ヒマラヤ地域の歴史は、西から東へと進む「インド化」ないし「ネパール化」が、自給的で統合性の高い生業様式を持つチベット系住民の居住地域を蚕食していった過程だったのではないかとと思われるのである。

この図式からいえば、中部ネパールの民族・文化の垂直構造は、両者の性格の重なる動的なものとして解釈されなければならない。この点まだ十分に説明することはできないが、長らく権力を保持しているインド系のもとに南北の領域全体が政治的に治められており、彼らの本拠たる稲のゾーンでは諸民族が混住することが東西的に共通している事実は、ミッドランドを中心に社会分業を押し進めるインド系の性格の結果であり、ミッドランド以北を占めるチベット系住民に見られた垂直的棲みわけとも受け取れるような現象も、彼らの適応性ゆえの社会・文化の分化、あるいはインド系政権のもとで進められた同高度における社会的分業、ないし高度別の分業化の進展の結果であったのだと理解することは、可能であろう。つまり、中部ネパールは、ヒンドゥーとチベットという、異質の性格を持つ強い文化が出合いながらも、前者が勝って後者を取り込み、改宗させつつあった意味で、文化・民族の垂直的棲みわけが、より鮮明になりつつあったところではなかったかということである。

これに比べれば、ブータンは、「ネパール人」入植以前までは西からの影響を直接にはほとんど受けていなかったと一応考えられる。しかもおなじチベット系でも、より先住民的な諸民族が住ん

図16 民族系列からみたヒマラヤの東と西

	西：インド・ネパール系 ←	→ 東：チベット・ビルマ系
環境一般や森林との関わり、人口密度	環境への適応様式が比較的ワンパターンである。しかし、人口稠密であって、より不利な土地さえ利用しうる特殊化した集団をも生み、森林を大きく破壊した環境を形成する。	環境への適応性に富み、生業・生活様式が可変的である。拡大過程を通じて、寡民的傾向があつて森林の破壊は比較的小さい。
民族の移動経路ないし分布のあり方	むしろ西から東へと、生態区ないし高度帯沿いに、移動・分布する傾向があり、垂直的の棲みわけを形成しがちである。	生態区を越えて北から南へ降りて、谷沿いの南北方向に分布した傾向があり、民族の東西的（水平的）な棲みわけを形成しやすい。ただし、特定の高度への適応を繰り返す結果、生業・生活様式のうえでは同一民族内でも分化し、パッチワーク的になりやすい。
社会・民族集団間の分離・融合	融合せず、社会・民族集団間の分離傾向の結果、民族・社会が重層化しやすい。とくに経済の中心地であるミッドランドではそれがいえる。	互いに融合しがちで、地域ごとに比較的単層的な社会空間を形成する。
経済全般における空間ないし社会的分業について	分業的・相互依存적であつて、交易・商業の発達が著しい。より広域の、多様な社会集団に依存することで経済活動が、成立している。	統合的・自給的であつて交易・商業の專業発達に乏しい。地理的にも社会的にも比較的狭い範囲の中で経済活動が成立している。
ヒマラヤ南面における垂直構造	特定のゾーンを占める支配的集団が、他の弱小ゾーンの住民を高度分業的に取り込む一方、高度差の大きい移動は、專業的移牧集団や交易集団によって従属的になされる。	統合的で比較的狭い自立性の高いパッチの、ゆるい数珠つなぎを形成するか、ブータンのように、季節的移住などによって高度別分業が少ないかたちで生産を行つて統合を確保する。

であるアルナーチャルに比べれば、ブータンの垂直構造は、牛類家畜の移牧や住民の季節的移住、そしてこれを、あるいは強く促した政治・宗教体制によって、はるかに利用高度域が大きく、高度に構造化されている。筆者自身は、ここにチベット系住民におけるチベット文化のもつ意味を見るように思う。つまり、「トライバル」とでもいふべきチベット系先住民と「チベット人」の違いは、牛類家畜の牧畜と農耕の結合度の強さ、チベット型の政治・宗教にあり、この意味では、西方ないしインド、あるいは中国北部から受け入れた道具を、持ってはいるのである。しかしそれは、全体としてはインドないしネパール型とはかなり異質のものであり、そういう意味で、チベット系住民の居住地域内部の論理を受け継いだヒマラヤの経済・社会のチベット文化型発展、その実現例こそ、

ブータンの垂直構造だったのではないかと思われるのである。

このように、川喜田氏らの説明図式における高所の「チベット」と低所の「インド」の対立からヒマラヤをとらえる南北軸を、なんとかして回転させ、東の「チベット系」と西の「インド・ネパール系」の対立という東西方向の解釈軸につなぐことによって、はじめてヒマラヤが理解可能になるはずだということが、ブータンの垂直構造の位置づけを試みて、結論せざるをえない点の一つなのであるが、それぞれの民族系列内部における「文明」の中心とその縁辺としてのヒマラヤ各地の関係性の解釈や、ヒマラヤ南面各地の垂直構造の形成、変化の過程を考えるに当たっては、今後どうしても、Barth (1956) の指摘したような、民族・社会間の政治関係が注目され、その力学が、

利用されるエコロジカル・ニッチェや民族・社会間の分業の解釈と、リンクされねばならないように思われる。

注

1) 「ブータン」は、当地での発音に従うと「ブターン」と表記すべきだが、本稿では、日本での慣用表現に従い、「ブータン」と記す。

同国での滞在は、1983年8月23日～10月2日、1984年9月18日～11月9日、1985年8月16日～11月6日である。全体をあわせても、滞在了季節はモンスーン中からポスト・モンスーンの、夏から秋にかけてであった。

観察や聞き取りが、初歩的で断片的なレベルを越えられなかった理由には、能力の限界のほか、ブータン政府が学術調査を認めてなかったこと、山探しや登山が主目的で、実質上調査は片手間の範囲を越えない程度にしか日程にも組み込みえなかったこと、がある。

1985年分に関する全体的記録としては、堀 (1986) があるが、3度わたる踏査全体の公式報告は、『報告17号』(京都大学山岳部、1992年)である。本稿の内容は、その中に記した拙稿 (月原 1992) の内容と、一部であるが重複する。

なお、本稿がもとした未発表の旧稿とは、同題の学部卒業論文 (京都大学文学部地理学教室、1987年1月提出) であり、書き直した部分は、とくに、ヒマラヤ、チベットの中でのブータンの位置づけに関するところである。

2) これらの先学の報告例としては、Kawakita (1956a, 1956b, 1957, 1974)、川喜田 (1955a, 1955b, 1960, 1961, 1977)、飯島 (1960, 1961, 1982)、高山 (1960, 1979, 1989) などがある。

なお、日本人によるネパール研究は、Ishii (1991)、川喜田 (監修) (1984) によって知ることができる。

3) ヒマラヤの範囲や区分の問題については、高山 (1970)、佐々木(まとも) (1972)、また、ヒマラヤ全体、ないしネパールについて、文化地理的展望を得るには、川喜田(編) (1977)、石井(編) (1986)、Hagen (1971)、デュビユイ (1976) などが有用である。

ヒマラヤの地域区分については、行政区域が重要なが、登山探検史における接近路の事情とも、切り放して考えることはできないかと思われる。これに関しては、メイソン (1975) が参考になる。

4) 文化領域の問題については、大島・浮田・佐々木 (編著) (1989)、大林 (1990)、今西・姫岡・藤岡・馬淵(編) (1965)、川喜田 (1958) などでの議論を意識している。

5) 歴史的には、ネパールやブータン、ならびにインド-中国国境の決定においては、英領インドの果たした政治的役割が大きい。

本文に記したタイラからヒマラヤ主脈という範囲が国家領域となっているかどうかについては、ネパールでは広くタイラ平原を領土としているが、ブータンは、いわゆるドゥアールはほとんど領土としては失っている。また、ブータンから東部ネパールにかけては、ヒマラヤ主脈が北部国境と重なっているが、中部ネパールから西部ネパールでは、ヒマラヤ主脈以北もネパール領内に含まれている。

6) ブータン滞在中の観察、および多くの英国使節の記録などの文献によれば、夏のモンスーンが影響するのは、おおよそ5月から10月である。しかし、モンスーンの開始、終了はしばしば不明確であり、ちょうど、日本の北陸や東北で、梅雨入り・梅雨明けが不明確なのと似たような印象を受けた。例えば、1984年10月は、上旬から10日間ほど好天が続き、モンスーンはすっかり明けたと思われるが、中旬、さらに下旬に

も、数日続く悪天にあった。1985年10月の場合には、なかなかモンスーンが明けず、好天とも悪天ともつかない天気が続いた後、中旬に強力なサイクロンの襲来をみた。

7) 図7は、唯一入手できた気象データ (1971-81年、月別降水量) (Central Statistical Organization 1982(?):41-42) の数値を記入したものである。ヒマラヤにおける降水量の年変動は大きく、プラス・マイナス20から30パーセントにも達することは知られている (山田 1970:190)。しかしそれでも疑問の残る数値はのぞいたうえで、各地点での最大の数値を記入してある。

8) ドゥアールは、全部で18あり、そのうち11はBengal Duars、7つはAssam Duarsに属していた。例えば、モーリス (Morris 1935:209)、ホワイト (White 1910, 1914)、レニー (Rennie 1866)、デブ (Deb 1973) などを参照。

9) これらの数値は、同じミッドランドに属するカトマンズ (Kathmandu, 1361ミリ)、カリンボン (Kalimpong, 2250ミリ)、ヤトゥン (Yatung in Chumbi Valley, 876ミリ) などと比較しても少ない。なお、チベットの首府ラサ (Lhasa) では、406ミリである。以上の数値は理科年表昭和58年 (東京天文台(編)1982) による。

10) 膨大な文献に基づいてヒマラヤ全体の植生図を完成させたシュヴァインフルト (Schweinfurth 1957) は、マツを中心とするこの乾燥植生を、特に Dry Lower Slopes of Bhutan and Nepal なる植生タイプとして分類した。1972年の論文では、この乾燥地は、ヒマラヤ東部の横断山脈中を流れる大山河川の河岸の乾燥とも成因においてつながるとして、より大きな地表的規模にたつた観点から検討されるという展開をみているのであるが、1957年の彼の植生図では、それは、ブータンの主要河川の中流部と、ネパールにおいては、西部のベリ (Bheri) 川にのみ現れている。また、この植生が現れる場所に共通の特徴として彼が指摘していることは、南北に流れる谷であること、日中きまって吹きあげる風があることであった。そしてまた、乾燥の谷の成因は、日周期で発達する山谷風 (Berg- und talwinde) によると示唆し、それは、南北に向いた谷で局地的な発達をみるのだと説明している。

この風は、植物学者グリフィス (Griffith) が、土壌の乾燥と関連づけて記録してから (Eden 1972:1865:296,305)、乾燥の谷に関連するものと考えられてきた。たとえばグリフィスらは、冬のブナ谷で、強風のもたらす砂塵になやまされ、屋根が吹き飛ばされることがあったことなども記録している。

中尾 (1971:72)、桑原(編) (1978:120-123) らも、この風によって、河谷の乾燥を分析、説明している。

また、佐々木 (1982:110,118) は、マツは、焼畑などによって照葉樹林を破壊したあとの二次植生であるとして、それは、乾燥化、過放牧などの条件によって照葉樹の生育が不十分なところで生育してくるものであると指摘している。

また、ブータン在住 (1985年当時) のチベット仏教学者、今枝由郎氏の御教示によれば、パロヤティンブーの人は、周辺の山地に入ることがあると、付近の木の繁茂を嫌い、ただ歩いている時でも、どんどん伐採していくという。その理由は、野獣が村に近づくのを防ぐためであるという。

日射をよく受ける場所においては、樹林の人為破壊、放牧による土壌の露出等が土壌の乾燥をもたらすし、山谷風の局地的な発達を助長することも推察される。焼畑などによる森林の伐採、家畜の放牧といった人為に加えて、地形、土壌、降雨、日射などの諸要素が、山谷風の局地的な発達にかかわり、乾燥をもたらしているのであろう。

地形要因についてみれば、一般的に谷底よりも標高の高い尾根の方が降雨が多いということにとどまらず、東部ヒマラヤの降雨のスタイルが、図4のように南面斜面を集中域とすることを考えれば、さきにも、ブータン南部山地の標高が高いということも無視できないであろう。山田 (1970:192) は、ネパール (特に、夏のモンスーンによる降水が年降水量

のほとんどを占める東部ネパール)においても、マハーバラト山脈背面(北面)に降水量の少ない谷が存在することを図示し、「北上した気流はマハーバラト山塊にぶつかって水蒸気を凝結させ、降雨をもたらしたあと、同山塊北面では下降気流となって一種のフェーン現象を起こし、その結果、乾燥した谷を発生させる。」と述べている。

筆者がモンスーン中に観察したところでも、パロ、ティンブーといった谷では、南にそびえる山地のために、雲底が低くまで降りては来ず、霧は尾根にまとわりつく様子がしばしば見られた。

- 11) この現象は、ヒマラヤ全域、チベットなどに共通してみられる。シュヴァインフルトは、これを日射(exposure)の影響として、トロール(Troll)とシェーフアー(Schafer)の説を引いて以下のように説明している。

「ユーラシア内陸の、およそ北緯30度以上の地域、例えばアマネマチン山群においては、北側斜面が森林で、南側斜面は草地を呈するという顕著な景観があらわれる。ほとんどの降雪は冬季に起こるが、南向き斜面では日々融けて消えるのに対し、北向き斜面では冬じゅう残ることになる。その結果、北斜面の植生は雪にずっと覆われ、つまり保護されるのに対して、南向きの斜面の植生にはこの保護物がなく、日々日射を受けて昼間と夜間で極端な温度変化にさらされることになる。そしてこの温度差は、大陸内の緯度、ならびに標高の高いところでは大変極端なものとなる。」(Schweinfurth 1972: 282)

プータンにおいてこの現象がよく見られるのは、中央の谷々周辺と北部高地であるが、降雪はともかく、共に日射(特に冬季)は豊富な地域となっている。

- 12) 図8は、現地地で得られた農作物の作付高度、家畜の飼育高度の情報によっているが、低地に関しては、ペンバートン(Pemberton, Eden 1972(1865):259-262)などの文献資料によって補っている。
- 13) 生活上、牧畜産物の意味は小さくないとはいえ、プータン西部のみみた集落は、全て耕作限界内に位置しており、定住限界付近の集落でも、主食の獲得の点では、農耕は牧畜よりも重要ということ、そして農耕は、牧畜よりも時間的・空間的に集中した労働を要求し、それゆえに生業活動の全体的性格に強い影響力を持つことによって、個々の集落での農耕のあり方—作物帯—が、3つのゾーンを区別する指標として有効な力を持っているのではないかと考えられる。
- 14) ここで述べた二毛作の上限は、本稿の類型の意味での「ヤクのゾーン」の下限といってもよい(ただし、ヤクは、中間のゾーンにおいても見られるため、本来的な語義の上では成立しないが)。

プータンでの二毛作の高度限界は、適当な事例を見ることができず、確認できなかったのだが、ポテンシャルとしては、ネパールの場合の標高約3000m(川喜田 1977:20-21)とさほど変わらないと想定しておいてよいかと考えられる。

これをわれわれが確認できなかったことは、「畑の限界は2800メートルである」という、1969年京大藤松田氏の観察ともよく一致している(桑原武夫(編) 1978:138)。耕地はほぼ集落の近傍に限られているからである。なお、この標高2800mという「限界線」以下の耕地では、必ず二毛作がなされている、というわけでは決していない。

- 15) この用語は、一家の財を集中、保存している家屋がある集落という意味に用いている。
- 16) 例えば鹿野(1972)が示しているように、ネパール、クンブ地方のシェルパ族においては、ジャガイモの導入が人口の増大を引き起こし、ジャガイモが大変にとってかわって、主作物、主食の位置を占めるようになったことが知られているが、プータンにおいては、現在でも、ジャガイモの重要度は全般に高くない。リンシ、ラヤ、ルナナの各地方でも、依然

として大麦が中心であり、ジャガイモはごく副次的な作物でしかない。

なお、プータンへのジャガイモの導入は、1774年、英国使節ボーグル(Bogle)による(Markham 1876:19)。

- 17) 1985年、ティンブーにおけるヤク1頭の値段は、5-7歳、7-9歳、9-12歳、12-15歳でそれぞれ、2500、3500、5000ヌルタムであった。またインド産輸入米とプータン産赤米(上米)は、キロ当たり、それぞれ4、7ヌルタムであったことから算出した。
- 18) 例えば夏季にヤクのほとんどを高地の放牧地へ追い上げているときでも、母村の家には留守番があり、舎飼いでいる馬の面倒や農作業をこなす。生活に不可欠なのか、多数の牝ヤクあるいは牝牛もおいで乳を搾っていることが多い。秋に去勢ヤクをつかって交易に出かけるときでも、牝ヤク、子ヤクの面倒を見るために居残る者も必要である。
- 19) 1982年にラヤ地方を訪れたNHK取材班は、ヤクは、ラヤ地方全体で約6000頭、ラヤの集落で約4000頭あり、また、(おそらくラヤ地方全体)人口はほぼ1000人、戸数は100戸から200戸のあいだであり、(おそらくラヤ集落の)1戸あたりのヤクの保有数は、子ヤクを含まないで30頭から50頭である、と聞き取って記録している。これによっても、人口1人あたりヤクが6頭ほどもある勘定となり、チベットのチャンタン高原やアマド地方の、農耕にはたずさわらない遊牧民ほどではないにしろ、かなりの数のヤクを持っていることがわかる(NHK取材班 1984:229)。
- 20) 牛はインド系の牛(ゼブ牛)のほか、東方のアルナーチャル・プラデシュ方面から輸入されているミタン牛が、良い乳を出すために珍重されている。一般に、プータン人は、ヤクの乳製品を好み、牛のそれは好まないが、ミタン牛やその一代雑種ジャツアムのそれはすぐれるようである。
- 21) 西プータンの稲のほとんどは水稻であり、その多くが赤米種である。米粒の円いジャボニカタイプのもも、長いインディカタイプのももあるが、栗田(1986:481)は、赤米種はジャボニカであるとしている。実見したところでも、植えられている稲は赤米種の方が多く、それのほとんどが短粒型であった。また、西岡(1978:71-72,151)によれば、東プータンにはもち米もあるという。
- 西プータンでの水稻栽培限界がこれほど高いことは、ネパールにおけるそれが標高1500-1900m(Kawakita 1956)、シッキムにおいて標高1500m(Bell 1928:132)であるのと対照的である。この栽培上限の高さの理由は、プータン中央の谷々では日射量が多いこと(中尾・西岡 1984:110,112, Bell 1928:132)、赤米種は水温の低いところ、日照時間が少なく温度が低いところでも割合に安定した収量をあげること(佐々木 1982:113-114, NHK取材班 1983:139-140)にあるらしい。
- プータンのような、標高2400m以上の稲作の例は、西ネパールのほか、雲南から四川省にかけて、何カ所か見られる(Uhlir 1978)。
- 22) たとえば、経済を中心に据えた起源論的発想にたてば、例にみえてきたような垂直的移動は、まず畜群の移牧サイクルに促されて発生し、それに従った多数の高度での農業生産の有利性が付加されて、農牧生産が安定化し、存続したと考えることは自然である。
- 23) 彼らの食生活や衣服の素材などを見れば、大麦のツアンパとヤクの乳製品、ヤク・ウールの衣服という組み合わせや、陸稲やトウモロコシと根菜類、イラクサなどの植物繊維の衣服という組み合わせが伝統的に見られ、明らかに、高地ないし低地の産物への依存性が高い。
- 24) われわれはヤクと牛の一代雑種であるゾはほとんど見えないが、中間のゾーンの集落(たとえばバ)では、これがいくらか多い可能性はある。

- 25) ボース (Bose) の記録によれば、ウォンディボタンにおいても、その支配者 (知事) が、冬の間はウォンディボタンに住み、夏の間は、Khodakhaに住んでいた。また、ティンブー~ブナカ間を移動する政府に伴って、農民も季節移住していたことも記しているが、政府は、気候が普段よりも温暖な時には、ティンブー、ブナカの中でも、別 (少し高地の) の城へと移ることがあったとしている (Eden 1972(1865):346-347)。
- 26) 長距離交易をかなりの程度専門化した例としては、東ネパールのワロンチュン (Walongchung) のボテ、ソル・クンブ地方ナムチェのシェルバ族、西ネパール・トウクチュエのタカリー族などがあげられている。
- 27) 鹿野の整理との関連でいえば、例にみたブータン西北部のヤクのゾーンも、この整理の図式の中にはいると思われる。すなわち、家畜はヤクが中心で、特定の民族集団が高地の比較的狭い範囲を占め (ルナナ、ラヤの場合は、ヤクの歩く距離にして3、4日程の広さが村の範囲である)、その中で距離の小さな移牧範囲をもち、農業と移牧を複合的に経営し、比較的小規模な交易を自ら行うというものである。
- 28) 英国使節の記録の中でも、チベットのカムパ族や、カシミール人が交易に来て少数の常設商店を開いていたこともあることが記録されている。西川一三は、そういうかたちでブータンに商売をしに来た「チベット人」の一人であった (西川 1978:85-86)。
- 29) ホワイト (White 1914) などにみられるように、かつて、勢力のある郡長 (Penlop) たちが、自分の城 (Dzong) の近くに、鍛冶屋、木地屋、左官などをおいていた。今日でも、こうした職人の集落は、中央の谷々の中に残っており、伝統的な工芸も保存されている。
- 30) 例えばモーリス (Morris 1935:204) は、ブータン南境のサルバン (Sarbhag) には、1870年頃までブータン人がいたが、それから、おそらく人口の減少によって、山地への退却移動が起こり、1910年頃から、「ネパール」人が入植し始めたことを記録している。
- 31) アリスは、ホジソンが記録した「Takpa」の言語資料によってその系統を検討したシェーファールの研究における位置指定の単純なあやまりをただし、シェーファールの言う「Dwags」地方の言語は、ツァンボ川沿いのタクボ地方の言語ではなく、カメン県 (District) のタワン付近のインフォーマントから得られた「ダクパ」の言語であったことを示し、これは、現在、中国でモンパ (門巴) と認定されている人々の北部グループの言語にほかならず、中部ブータンのブムタン語は、それに非常に近いと述べている (Aris 1979:xiv-xviii)。
- 32) こうした諸言語、諸方言の分布状況がある程度よく示しているのは、たとえば栗田の作成した、ブータン人自身の認識による方言分布状況である (栗田 1986:464)。
- 33) ブムタン語と北部モンパ語、ツァンラ語と中央モンパ語の類縁性を指摘したアリスにならえば、ブータンにおける非チベットの要素は、モンパ的要素と言い替えることができるのかも知れない (Aris 1979:xv-xviii)。
- 34) アリスは、パロの南方のトクトカ (Toktokha) に住むトクトップ (Toktop) と呼ばれる人々、プンツォリンの西のタバ・ドラムテン (Taba Dramten) やロト・クチュ (Loto-Kuchu) に住む人々をその例としてあげており、前者のイラクサで織った衣服は、レプチャの衣服に似ているとすほか、近年でもドゥアールに数百人の人口が報告されているトト (チベット系) との関係も有り得ることを述べている (Aris 1979:xvii-xviii)。
- また、栗田も、プンツォリンの西岸のタバ・デュラデュル (Taba Dradul) について述べている (栗田 1986: )。
- ドゥアールに住むメチヤトトに関する記述として筆者が知るものには、Sanyal (1973)、Gupta (1985)、Majumdar

(1985) がある。

- 35) 英領インド関係者としてブータンを訪れたモーリス (Morris)、イーデン (Eden)、ボース (Bose)、ペンバートン (Pemberton) などは、ブータン南境には、本文に記したようなボド系住民がいたことを記録しており (Morris 1935:205; Eden 1972(1865):61,351,161)、イーデン、グリフィス (Griffith) らは、ティンブーやブナカなどで、アッサムないしベンガルからつれてこられた奴隷を多数見たと記録している (Eden 1972(1865):96,297)。

- 36) アリスによれば、以下の諸地方から使節がきて、シャブドゥンに自発的に貢物をもたらしたという (Aris 1979:229)。

東部ブータン: Merag Sag-stengs,

Kha-ling, gDung-bsam

西部ブータン: sPa-gro

中部ブータン: rTse-rag-dum-bu, Rus-kha

A-sdang, Dar-khar

北部ブータン: Gling-bzhi, Phi-yags-la,

Lung-nag, dGon

ドゥアール: rTa-mchog-grong (Hajo),

Chu-bar Ra-dza,

Bye-ma, Cooch Bihar

そのほか: Phag-ri, Eastern Tibet,

Western Tibet, Nepal,

Sa-skya-ba (Central Tibet)

チベット世界におけるブータンの承認がなされたと言ってもよいが、争うことになるグライラマ5世とモンゴルからの貢物は受けていない。

- 37) アッサム史のうえからは、17世紀からドゥアールとブータンの関係が記録に残されているようである。アリスによると、ブータン東半部の南のアッサム・ドゥアールは、1655年頃に、すべてブータンの領有するところとなり、アホム王 (Jayadvaj Singha) とシャブドゥン (死後) の間で、文書による確約がなされている (Aris 1979:110-114,239)。

また、ベンガル・ドゥアールに位置するクーチ・ビハールに対しては、シャブドゥンが西ブータンに入ったとき、チャブチャ (Chapcha) の有力者は、既にクーチ・ビハール王ベマ・ナラヤンと親交があった。その関わりから、クーチ・ビハール王は、シャブドゥンに接して半ばチベット仏教化し、1661年、ミール・ジウムラの率いるイスラム教徒軍がクーチ・ビハールに侵入したとき、クーチ・ビハール王はブータンに逃亡し、イスラム教徒軍とブータンのダルマ・ラジャの間で文書が交換されたという (Aris 1979:214,239)。

また、デブによれば、1680年には、ブータンはクーチ・ビハールの王位継承問題に干渉している (Deb 1976:73)。

ブータンの場合、既述のように、「ネパール」人入植以前は、現在のブータン南境付近まで、ブータン人集落が降りていたことが知られている。また、アホム王朝との間などで、冬季はドゥアールに進出して、そこの冬季の土地使用権を得る契約をしていたことが記録されている (例えばペンバートンの記録、Eden 1972(1865):161-184)。ブータン-イギリス戦争は、これらドゥアール地方の権益を争うものとして、後に発生したものである。

ブータン東境からカメン県 (Kameng District) にかけて住んでいるボテ (モンパ族) も、ドゥアールを領有していた例がある (Mackenzie 1884:15-20)。

これ以外の地域で、「チベット人」(ボテ) がヒンドウスタン平原に居住圏を接していた例は管見のかぎりない。

- 38) 各地方の納税については、毎年ブナカでおこなわれる新年

の祭りの際に、各地方から持参するように定められたという (Aris 1979:229)。こうしたことによって、南北の経済の帯は、東西にも結ばれた様相がうかがえる。住民の課税制度については、ずっと以前に、ラ派 (Hlpa, 12世紀) などモン (rDzong) を中心とする制度を導入して、賦役などを課していたようであるが、シャブドゥンの時代には、住民に対して、*Khral* (納税)、*'ul* (賦役)、*bu-gte* (役、家族のなかで、何人かのうち一人が政府の職務につく) などの義務を確立したようである。輸送や公共建築の人手は、住人の賦役によってまかなわれている。

- 39) アリスによれば、ブナカ・ゾン (1637年)、ティンブー・ゾン (1641年) の完成によって、政府 (僧侶・役人たちは)、それぞれを冬の都、夏の都として季節的移住をはじめた (Aris 1979:221)。アリスは、この移住のために、この地方の人々の間で、現在でも残る季節的移住があるのだとしている。当時、シャブドゥンとつながりをもった僧が、いくらかチベットよりブータンに入ったことは記録されているらしい。ティンブー・ブナカの僧侶の数は、栗田によれば、現在でも1100人ほどうである (栗田 1984)。
- 40) ヒマラヤの前山をなす山列という地形の影響を受けて、人口が分布する様相は残っている。つまり、尾根上よりも谷あいや緩傾斜面に人口が多い傾向があり、山列の南面の森林の濃密な場所よりも、雨陰効果をうけて比較的乾燥している北面の斜面や谷あいのほうが、入植が早かったことが、一般に知られている。図15では、各県の行政区画が地形をうまく反映する形にはとられていないことからあまり明確にでてこないが、現在でも、人口分布をドットで示したような地図によって、このことを確認することができる (ブータンについては、例えばKaran 1967:48)。
- 41) 前掲、Karma Dorji氏の御教示による。
- 42) 例えば、高い南部山地の存在とブータン・ヒマラヤ全体の凝集性である。この全体的地形のゆえに、ミッドランドの谷あいである中央の谷々も大きな盆地ではなく、しかも比較的標高の高いものが多く、またヒマラヤ南面においては特異とも言えるほど乾燥している。
- 比較的標高の高いハヤムタンでは冬季にヤクを下ろせるし、ティンブー、パロ、ブナカなどでも、その間をなす尾根の上なら十分にヤクをおろすことができる。また、谷々の乾燥の裏返しである日射や暖かさによって、稲作上限は高くなりうる。一言でいえば、ヤクと稲が接近しうる自然条件が、ブータンの中央の谷々にはあったのである。それは実際に実現しており、ヤクと稲のある空間は、両者が互いを囲いあうごとくである。その近接性は、たとえば冬季のヤクの放牧地であるシンチュ・ラ (Sinchu La, 標高3300m) から、ティンブーやブナカまで、駆け降りればほんの2、3時間で行けるほどなのである。ブータンは、おそらく、水田並びにヒンドゥスタン平原に、最もヤクが近づいている例であるといえるであろう。
- 43) われわれの主たる関心は、生業様式・生活様式の空間構造における通ヒマラヤ性の確認にあり、ひいてはヒマラヤ地域の文化領域にあるため、民族・文化領域としてのチベット (Ethnic Tibet, Cultural Tibet) を意識して、ドライ・ラマの治めた政治領域としてのチベット (Political Tibet) にはもちろんこだわってない。本稿でもこれまで、場所をさす場合をのぞき、「チベット」をその意味には使っていない。
- 44) 東ネパール・アルン川流域のロミ (Lhomi)、東ブータンのダクパ (Dakpa)、アルナーチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) のモンパ (Monpa)、シェルドゥクベン (Sherdukpen)、東チベットのタクポ (Takpo)、ニャン (Nyan)、コンポ (Kompo)、ポボ (Pobo, Pome: 波密)、ザユル (Za Yul) などの諸地方に住む人々があげられる。また、雲南・四川方面にも、このような住民は少なくない。いわゆるチベット人の居住地の中でも、たとえば、東チベットのバタン (巴塘) は、トゥモロコンのできる土地であるよう

に、東チベット (カム) には低地に住むチベット人人口はたいへん多い。

ヒマラヤ全体をみれば、こうしたチベット人が、その生活圏をヒンドゥスタン平原に接する低地まで南下させたのは、ブータンと、その東どりのカメン県 (Kameng District of Arunachal Pradesh) においてのみであると思われる。

- 45) スタン (1971) は、「古代チベット人について持つべき観念は、森の上方の山の牧地と、谷間の畑地を往来する人の姿である」と述べているが、ヒマラヤ南面や東南チベットにおけるこのような場所とは、まさに濃密な針葉樹林の下にありながらヤクの群れを持っていたハヤムタンのような場所なのである。またそもそも、家畜ということだけでいえば、中央チベットの農耕地帯では、ヤクを持たず、牛しか持たないような農民は、まったく珍しくない。チベットの基層に横たわるものを捉えようとするならば、交易が専業化せず、複合度の高い農牧を、比較的小さな水系のなかで行っている人々の生業様式は、研究上重要な意味を持つであろう。
- 46) 民族系列としてひっくりめることで、たとえば、チベットとブータン、さらにはアルナーチャルの住民という、文化の発展段階の異なる住民に、連続・共通する性格を想定してしまうようになった。だから、たとえばチベット系住民の中でも、チベット仏教の有無や、言語の細かな系列の違いなど、文化の発展段階にも関わることががら、移牧など農牧生産において利用される高度域のような垂直構造のタイプの問題と、どれだけ関連しているのか、あるいはそのタイプにおいてどれほど同質なのか、という問題が生まれる。この問題には十分には答えられないが、次のようにとりあえず考えておくことはできるのではないか。

文化の全体性を決める核心的な部分は、おそらく、生業・生活様式よりも、言語・宗教など、より精神的、社会的な文化の側面が大きく影響して形成されている。ところが、それは捉えがたいものである。しかし、たとえ発展段階が異なっても、個別要素を変えらなくても、民族系列として維持されるような全体的性格は、有り得るのではないか。たとえば、ヒンドゥー教やチベット仏教という宗教、そしてそれらが密接に関わって存続している社会の特質というものも、それぞれの系列が持っている文化的性格の基礎を受け継いでいて不自然ではない。

そして、社会・民族の分離や融合、あるいは生業経済における分業や統合の問題を、その持続する全体的性格の可視的現れとして、捉えることも可能なのではないか。

しかし、現在観察しうる民族・社会の分布や重なり形成においては、本文に記す、Barthの検討したような政治関係の問題の方が、そうした性格よりも通文化的に大きく影響する要件である可能性は大きいために、それが今後検討される必要がある。

たとえば、ブータンなり中部ネパールの垂直構造といっても、その形成は、それぞれの場所がもっていた、個別の民族・社会間の政治的力関係があつてこそ生じたはずであり、それはまた、人口密度や、未開発の森林を開発しうる集団の問題とも絡んでいたはずである。

## 文献リスト

- Aris, Michael (1979) *Bhutan: The Early History of A Himalayan Kingdom*, Aris & Phillips Ltd., Warminster, England.
- Aris, Michael (1982) *Views of Medieval Bhutan: The Diary and Drawings of Samuel Davis 1783*, Serindia Publications, London.
- Barth, Fredrik (1956) *Ecologic Relationships of Ethnic Groups in Swat, North Pakistan*, *American Anthropologist* 58:1079-1089.
- Bell, Charles (1928) *The People of Tibet*, The Clarendon Press, Oxford.
- Battacharyya, Anima (1985) *Human Ecology in Bhutan and*

- Modernizing Trends, Chaube (ed.) 1985:17-25.
- Bhattacharya, S. S. (1985) Planning Strategy in Bhutan, Chaube (ed.) 1985:210-228.
- Carrasco, Pedro (1959) Land and Policy in Tibet, University of Washington Press, Seattle.
- Central Statistical Organization (1982 ?) Statistics at a Glance, Central Statistical Organization, Planning Commission, Royal Government of Bhutan, Thimphu.
- Central Statistical Office (1987) Statistical Yearbook of Bhutan 1987, Central Statistical Office, Planning Commission, Royal Government of Bhutan, Thimphu.
- Chakravarti, B. (1979) A Cultural History of Bhutan, vol. 1, Hilltop Publishers, Chittaranjan, West Bengal. (Revised Second Edition, 1981).
- Chakravarti, B. (1980) *ibid.*, vol. 2.
- Chaube S.K. (ed.) (1985) The Himalayas :Profiles of Modernization and Adaptation, Sterling Publishers Pvt. Ltd., New Delhi.
- Coelho, V.H. (1970) Sikkim and Bhutan, Indian Council for Cultural Relations, Vikas Publications, Delhi. (三田幸夫・内山正熊(訳)、『シッキムとプータン』集英社、1973年。)
- Das, Nirmala (1973) The Dragon Country :A History of Bhutan, Orient Longman Ltd., Calcutta.
- Deb, Arabinda (1973) Cooch Behar and Bhutan in the Context of the Tibetan Trade, Kailash, 1(1):80-88.
- Deb, Arabinda (1976) Bhutan and India :A Study in Frontier Political Relations (1772-1865), Filma Klm Pvt. Ltd., Calcutta.
- Dhakal, D. N. S. (1987) Twenty-Five Years of Development in Bhutan, Mountain Research and Development, 7(3):219-221.
- デュビユイ, ジャック (1976) 『ヒマラヤ』水野勉(訳)、文庫クセジュ597、白水社。
- Eden, Ashley (1865) Political Missions to Bootan, comprising the Reports of the Hon'ble Ashley Eden, -1864 ;Capt.R.B.Pemberton 1837,1938 ;with W.Griffiths's Journal and the Account by Baboo Kishen Kant Bose. (repr. 1972 by Manjusri Publishing House (Bibliotheca Himalayica, Ser.1, Vol.7.), New Delhi.)
- Elwin, V. (1959) The Art of the North-East Frontier of India, North-East Frontier Agency, Shillong.
- Frey, Kathleen (1983) Studies in Bhutanese History dealing with the Structural Organization of the Bhutanese Theocracy, Tibetan Review, 18(5):15-22.
- von Fürer-Haimendorf, Christoph (1975) Himalayan Traders, John Murray Ltd., London.
- von Fürer-Haimendorf, Christoph (ed.) (1981) Asian Highland Societies, Sterling Publishers Pvt. Ltd., New Delhi.
- von Fürer-Haimendorf, Christoph (1982) Highlanders of Arunachal Pradesh :Anthropological Research in North-East India, Vikas Publishing House Pvt. Ltd., New Delhi.
- 学習研究社 (1977) 『世界山岳地図集成 ヒマラヤ編』学習研究社。
- Gansser, August (1964) Geology of the Himalayas, Interscience Publ., London / New York.
- Godwin-Austen, H. H. (1894) Bhutan and the Himalayas East of Darjeeling, Scottish Geographical Magazine, 10:634-640.
- Gupta, Pabitra Kumar (1985) Modernization and Adaptation of a Sub-Himalayan Tribe, Chaube (ed.) 1985:137-151.
- Gupta, Shantiswarup (1974) British Relations with Bhutan, Panchsheel Prakashan, Jaipur.
- Hagen, Toni (1971) Nepal :The Kingdom in the Himalayas, 3rd English Edition, London. (1980年版からの邦訳、トニー・ハーゲン『ネパール』町田靖治(訳)、白水社、1989年。)
- Hasrat, Bikrama Jit (1980) History of Bhutan :Land of the Peaceful Dragon, Education Department, Royal Government of Bhutan, Thimphu.
- 堀了平 (1986) 『偉大なる獅子 マサ・コン峰登頂』講談社。
- 飯島茂 (1960) 「中部ネパールのタカリ一族 (Torbo民族誌-その1)」『民族学研究』24(3):1-22。
- 飯島茂 (1961) 『ネパールの農業と土地制度』アジア経済研究シリーズ第18集、アジア経済研究所。
- 飯島茂 (1982) 『ヒマラヤの彼方から』NHKブックス<カラー版>、日本放送出版協会。
- 今枝由郎 (1984) 「10日は鬼と仏の舞踏会」『季刊民族学』30:100-111。
- 今西錦司・姫岡勲・藤岡謙二郎・馬淵東一(編) (1965) 『民族地理』上巻、朝倉書店。
- 石井溥(編) (1986) 『もっと知りたいネパール』弘文堂。
- Ishii, Hiroshi (1991) Nepal Studies in Japan -Social Sciences and Humanities, Journal of the Japanese Association for South Asian Studies (『南アジア研究』), 3:109-135。
- 鹿野勝彦 (1972) 「クンプのシェルパにおける経済の変遷」『季刊人類学』3(2):159-186。
- 鹿野勝彦 (1978) 「ヒマラヤ高地の移牧」『民族学研究』43(1):85-97。
- Karan, Pradyumna P. (1967) Bhutan :A Physical and Cultural Geography, University of Kentucky Press, Lexington.
- Karan, Pradyumna P. (1987) Bhutan :Development amid Environmental and Cultural Preservation, Monumenta Serindica No.17, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa(ILCAA), Tokyo University of Foreign Language.
- Kawakita, Jiro (1956a) Vegetation, H. Kihara (ed.), Land and Crops of Nepal Himalaya, Scientific Results of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya 1952-1953, Vol. II, Fauna and Flora Research Society, Kyoto University, pp. 1-65.
- Kawakita, Jiro (1956b) Crop Zone, H. Kihara (ed.), *ibid.*, pp. 67-93.
- Kawakita, Jiro (1957) Ethno-Geographical Observations on the Nepal Himalaya, H. Kihara (ed.), Peoples of Nepal Himalaya, Scientific Results of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya 1952-1953, Vol. III, Fauna and Flora Research Society, Kyoto University, pp. 1-362.
- Kawakita, Jiro (1974) The Hill Magars and their Neighbours, J. Kawakita (ed.), Hill Peoples Surrounding the Ganges Plain, Vol. III, Tokai University Press.
- 川喜田二郎 (1955a) 「Nepalにおける民族地理学的諸観察 第1報 -宗教を指標とした文化の広がり」『民族学研究』19(1):1-57。
- 川喜田二郎 (1955b) 「Nepalにおける民族地理学的諸観察 第2報 -居住形態、地域構造、民族集団の生態学およびTibet人村Tsumjeの研究」『民族学研究』19(3-4):34-134。
- 川喜田二郎 (1958) 「アジアの文化領域についての最近の論争」『人文地理』10(2):62-72。
- 川喜田二郎(編) (1960) 『チベット人 -鳥葬の民-』角川書店。
- 川喜田二郎 (1961) 「ネパール・ヒマラヤにおける2, 3の生態学的観察 (Torbo民族誌-その3)」『民族学研究』25(4):1-42。
- 川喜田二郎 (1977) 「中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造 -生態学的・文化的・発展段階的の3観点を総合

- しての展望」『季刊人類学』8(1):3-80。
- 川喜田二郎(編)(1977)『朝日小辞典 ヒマラヤ』朝日新聞社。
- 川喜田二郎(監修)、(社)日本ネパール協会(編)(1984)『ネパール研究ガイド-解説と文献目録-』日外アソシエーツ。
- Kohli, Manorama (1982) *India and Bhutan : A Study in Interrelations 1772-1910*, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi.
- 栗田靖之(1984)「イネとヤクとラマ僧 -ブータン文化のタテ糸-」『季刊民族学』30:22-35。
- 栗田靖之(1986)「ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性」『国立民族学博物館研究報告』11(2):457-488。
- 桑原武夫(編)(1978)『ブータン横断紀行』講談社。
- Macaulay, Colman (1885) *Report of a Mission to Sikkim and the Tibetan Frontier with a Memorandum on our Relations with Tibet*, repr. 1977 by Manjusri Publishing House (Bibliotheca Himalayica, Ser.1, Vol.16.), New Delhi.
- Mackenzie, Alexander (1884) *Histoy of the Relations of the Government with the Hill Tribes of the North-East Frontier of Bengal*, repr. in 1979 entitled *The North-East Frontier of India*, Mittal Publications, Delhi.
- Majumdar, Bimalendu (1985) *Some Aspects of Social Change among the Totos of North Bengal*, Chaube (ed.) 1985:152-164.
- Markham, Clements. R. (1876) *Narratives of the Mission of George Bogle to Tibet and of the Journey of Thomas Manning to Lhasa*, repr. 1971 by Manjusri Publishing House (Bibliotheca Himalayica, Ser.1, Vol.6.), New Delhi.
- メイスン, ケニス (1975)『ヒマラヤ -その探検と登山の歴史-』田辺主計・望月達夫(訳)、第二版、白水社。
- Mehra, G. N. (1974) *Bhutan :Land of the Peaceful Dragon*, Vikas Publishing House, New Delhi, rep. 1981.
- Misra, R. C. (1985) *Institutional Achievements and the Process of Nation-Building in Bhutan*, Chaube (ed.) 1985:196-209.
- Molnar, Augusta (1981) *Economic Strategies and Ecological Constraints :Case of Kham Magar of North West Nepal*, von Führer-Haimendorf (ed.) 1981:20-51.
- Morris, C.J. (1935) *A Journey in Bhutan*, *Geographical Journal*, 86(3): 201-217.
- Munro, Lauchlan T. (1989) *Technology Choice in Bhutan :Labour Shortage, Aid Dependence, and a Mountain Environment*, *Mountain Research and Development*, 9(1):15-23.
- 中尾佐助(1971)『秘境ブータン』現代教養文庫、社会思想社。(原著は、1959年、毎日新聞社。)
- 中尾佐助・西岡京治(1984)『ブータンの花』朝日新聞社。
- NHK取材班(1983)『遙かなるブータン -ヒマラヤのラマ教王国をゆく-』日本放送出版協会。
- 西川一三(1978)『秘境西域八年の潜行(下巻)』芙蓉書房。
- 西岡京治・西岡里子(1978)『神秘の王国 -ブータンに"日本のふるさと"を見た夫と妻11年の記録-』学習研究社。
- 大林太良(1990)『東と西海と山 -日本の文化領域-』小学館。
- 大島襄二・浮田典良・佐々木高明(編著)(1989)『文化地理学』古今書院。
- Olschak, Blanche. C., Ursula Gansser, and Augusto Gansser (1971) *Bhutan :Land of Hidden Treasures*, George Allen & Unwin Ltd., London.
- Planning Commission (1985 ?) *Royal Government of Bhutan Fifth Plan 1981-1987*, Main Document, Planning Commission, Thimphu.
- Rahul, Ram (1971) *Modern Bhutan*, Vikas Publications, Delhi.
- Rahul, Ram (1983) *Royal Bhutan*, ABC Publishing House, New Delhi.
- Rennie, David Field (1866) *Bhotan and the Story of the Dooar War*, John Murray, London. (repr. 1970 by Manjusri Publishing House (Bibliotheca Himalayica, Ser.1, Vol.5.), New Delhi.)
- The Royal Government of the Kingdom of Bhutan (1979) *Bhutan : Himalayan Kingdom, The Royal Government of the Kingdom of Bhutan*. (栗田道子(訳)『ブータン -ヒマラヤの王国-』日本ブータン友好協会、1982年。)
- Rustomji, Nari (1971) *Enchanted Frontiers :Sikkim, Bhutan and India's North-Eastern Borderlands*, Oxford University Press, New Delhi.
- Rustomji, Nari (1978) *Bhutan :The Dragon Kingdom in Crisis*, Oxford University Press, New Delhi.
- Rustomji, Nari (1983) *Imperilled Frontiers :India's North-Eastern Borderlands*, Oxford University Press, New Delhi.
- 佐藤長(1978)『チベット歴史地理研究』岩波書店。
- Sanyal, Charu Chandra (1973) *The Meches and the Totos :Two Sub-Himalayan Tribes of North Bengal*, North Bengal Studies Series, Vol.1, The University of North Bengal.
- 佐々木高明(まとめ)(1972)『討論会第三部、ヒマラヤとその周辺、<出席者>中尾佐助・梅禪忠夫・谷泰、<司会>佐々木高明」、朝日新聞社(編)『探検と冒険 2 アジア I』朝日新聞社、76-105頁。
- 佐々木高明(1982)『ブータン紀行』『季刊民族学』20:108-122。
- Schweinfurth, Ulrich (1956) *Über klimatische Trockentäler im Himalaya*, *Erdkunde* 10(4):297-302.
- Schweinfurth, Ulrich (1957) *Die Horizontale und Vertikale Verbreitung der Vegetation im Himalaya*, *Bonner Geographische Abhandlungen*, Heft 20.
- Schweinfurth, Ulrich (1972) *The Eastern Marches of High Asia and the River Gorge Country*, Carl Troll (ed.), *Geocology of the High-Mountain Regions of Eurasia*, *Erdwissenschaftliche Forschung*, Band IV, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, pp. 276-287.
- Shafer, R. (1954) *The Linguistic Position of Dwags, Oriens*, 7(2):348-356.
- Shah, Sukhdev (1989) *Developing Bhutan's Economy :Limited Options, Sensible Choices*, *Asian Survey*, 29(8):816-831.
- Simoons, F. J. & Simoons, E. S. (1968) *A Ceremonial Ox of India :The Mithan in Nature, Culture, and History*, The University of Wisconsin Press.
- Singh, Nagendra (1972) *Bhutan :A Kingdom in the Himalayas*, Thomson Press (India) Ltd., New Delhi. (Revised Second Edition, 1978)
- スタン, R.A. (1971)『チベットの文化』山口瑞鳳・定方晟(訳)、岩波書店。
- スチール、ピーター (1978)『冒険家族 ヒマラヤを行く』金井弘夫(訳)、時事通信社。(translated from Peter Steele, *Two and Two-Halves to Bhutan :A Family Journey in the Himalayas*, Hodder & Stoughton, London, 1970.)
- 高山龍三(1960)「トルボ地域の農牧チベット人経済 (Torbo民族誌-その2)」『民族学研究』24(3):23-59。
- 高山龍三(1970)「ネパールの地理」川喜田二郎(編)、『ネパールの人と文化-学術調査隊の記録-』古今書院、95-111頁。
- 高山龍三(1979)『ヒト・文化・文明』八千代出版。

- 高山龍三 (1989) 『失われたチベット人の世界』日中出版。
- 東京天文台(編) (1982) 『理科年表 昭和58年』丸善株式会社。
- Troll, Carl (1972) The Three-Dimensional Zonation of the Himalayan System, Carl Troll (ed.), Geocology of the High-Mountain Regions of Eurasia, Erdwissenschaftliche Forschung, Band IV, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, pp.264-275.
- 月原敏博 (1992) 「ブータンの高地民-ヤクを追う人々-」『報告第17号』京都大学山岳部。
- Turner, Samuel (1800) An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama, in Tibet ;Containing a Narrative of a Journey through Bootan, and Part of Tibet, London. (repr. 1991 by Asian Educational Service, New Delhi.)
- Uhlig, Harald (1978) Geocological Controls on High-Altitude Rice Cultivation in the Himalayas and Mountain Regions of Southeast Asia, Arctic and Alpine Research, 10(2):519-529.
- Ward, Michael (1966) Some Geographical and Medical Observations in North Bhutan, Geographical Journal, 132:491-506.
- Ward, Michael (1972) In this Short Span :A Mountaineering Memoir, Victor Gollancz Ltd., London.
- White, John Claude (1909) Sikkim and Bhutan :Twenty-One Years on the North-East Frontier 1887-1908, (repr. 1971 by Vivek Publishing House, Delhi.)
- White, John Claude (1910) Journeys in Bhutan, Geographical Journal, 35:18-41.
- White, John Claude (1914) Castles in the Air :Experiences and Journeys in Unknown Bhutan, The National Geographic Magazine, 25(4):364-455.
- 山田知充 (1970) 「ネパールの気候に関する覚え書き」『山岳』65:188-198.
- 山本けいこ (1991) 『はじめて知る ブータン (Index of Bhutan)』明石書店。

## Summary

### Vertically Organized Structure of Subsistence Economies in Bhutan

Toshihiro Tsukihara

Department of Geography, Graduate School of Letters, Kyoto University

Based on field-observation done along with climbing and trekking activities ( Kyoto University Bhutan Himalaya Expedition 1983-1985 ), vertical structure of subsistence economies in Bhutan were analysed and compared with other Himalayas.

At least, three altitudinal zones are distinguishable according to the height of main village. These could be named "Yak zone" (3600-4100m.), "Middle zone" (2500-2900m.), and "Rice zone" (below 2500m.).

In Bhutan general, development of commerce and cash economy is still limited. Almost no "Bhutanese" family in local villages live exclusively on the income from trading business. Most of exchange for necessary living-goods are done without cash. Barter trade between "Nep" (business friend) still plays very important role in local trade. That kind of trade is not visible in "bazar".

The most significant characteristic of Bhutan's vertical economies is the seasonal migration of the people of "Central Valleys". All of these main valleys in Bhutan's Midlands, ex. Ha, Paro, Thimpu(-Punakha), and Bumthang(-Tongsa), belongs to either "Middle zone" or "Rice zone". Though most of the people in these valleys are not pastoralists but farmers, many of them have second or third house at lower part of the "Rice zone". They shift there in winter months, often with cattles.

Purpose of this seasonal migration are various. Though not all the family are engaging in Cattle-transhumance, many have cultivated-fields together with second or third house. In these cases, they are utilizing very wide range of altitude, which is much wider than that utilised by the people of the "Yak zone", or by the people of the lower part of the "Rice zone". Rich family has even Yak herd together with cattle herd.

Then, the people of "Central Valleys" have less necessity for seasonal trading activity with other ecological zones. We can easily find highland element (ex. Yak, Yak butter, Yak wool, etc.) and lowland element (ex. Rice, Cattle, etc.) in these valleys. Considering altitudinal width of production range and non specialization to commerce or other economic divisions, such environmental use is rare in Himalayas in spatial scale and integration of economic divisions.

These characteristic represents economic advancement of Bhutan's Midlands. And also, it might hint economic back ground for the power which "Central Valleys" had in Bhutanese History.